

新古改撰誌記

卷之四

〔朱書〕
「式百貳拾六」

以書付奉申上候

今廿四日朝六半時頃庭掃除ニ罷出候処、裏垣根内ニ古はき之女小袖沓ツ捨有之候ニ付、地主御小人頭岩崎伝兵衛組御小人菊地紋右衛門江相届ケ申候、同人病氣ニ付官左衛門罷越様子見候而主も有之候哉与近辺承り候処、心当り之者も無御座候、不得止事地主紋右衛門より明廿五日御届ケ申上候ニ付此段御届申上候、以上

〔朱書〕
「天保四」巳四月

藤村栄太郎 印

鈴木宇右衛門殿

鈴木宇右衛門様

急キ尊答

岩崎伝兵衛

拝見仕候、被為致愈御快気奉賀寿候、然者御組藤村栄太郎より其御手元江も借地住宅庭内江古女小袖捨有之候旨御届差出申候由被仰越、右ニ付組紋右衛門よりも只今相届申候、則明日御届可仕与左之通認差上申候間御一覽可被下候

覚

拝領屋敷
本郷菊坂町

岩崎伝兵衛組
御小人
菊地紋右衛門

右紋右衛門地面西丸勤御中間目付藤村栄太郎江貸置候処、栄太郎義昨廿四日朝六半時頃構内見廻り候処、裏通りニ八丈島・縮緬取交継々古女小袖沓ツ捨有之候ニ付、近所承合候得共主出申候間、入念心附置候旨紋右衛門相届申候、依之申上候、以上

四月廿五日

御小人頭

岩崎伝兵衛

右之通只今下書認申候、甚取込大乱筆御高免可被下候、以上

御届申上候覚

一、御小人頭岩崎伝兵衛組御小人菊地紋右衛門拝領屋敷之内、本郷菊坂町ニ而五拾坪之処借地住宅仕罷在候処、昨廿四日朝六半時頃私義庭掃除ニ罷出候処、裏南之方垣根内ニ古キ継々女小袖沓ツ有之候ニ付、家内之者共ニも申聞候処見知り無之、着類故早速近辺之者江も承合候処心当り之者無御座候ニ付、早速地主紋右衛門方江相届候処、同人病氣ニ付倅菊地官左衛門罷越着類見届、御頭伝兵衛江も御届可申旨申聞罷帰申候、依之伺旁御届申上候、以上

四月廿五日

藤村栄太郎

鈴木宇右衛門殿

覚

一、古はき〜女小袖

沓ツ

但 黄縞八丈

生壁色八丈

同色縞縮緬

麻の葉大形有之更紗染縮緬

袖口黒縹子

朋裏古紅継々

裾廻し花色絹

右之通御座候、以上

四月

(朱書)

〔此書面四月廿五日差出候処御届振不宜、翌廿六日引替出し直不用

相成候得共為見合留置〕

(朱引)

宿所本郷菊坂町

岩崎伝兵衛組御小人

菊地紋右衛門地面借地

住宅

鈴木宇右衛門組

西丸御中間目付

藤村栄太郎

右栄太郎儀昨廿四日朝六半時頃住居構内見廻り候処、裏垣根内

二八丈縞・縞縮緬取交継々古女小袖袴捨有之候ニ付、地主紋右

衛門江も申達近所承合候得共主出不申候間、同人より頭伝兵衛

江届出候旨栄太郎相届申候、依之申上候、以上

四月廿五日

御中間頭

鈴木宇右衛門

巳四月廿六日御扣共式通西丸御当番中根平十郎殿江御部屋宗運を

以差出ス

宿所本郷菊坂町

岩崎伝兵衛組御小人

菊地紋右衛門地面借地

住宅

鈴木宇右衛門組

西丸御中間目付

藤村栄太郎

右栄太郎儀一昨廿四日朝六半時頃住居宅構内見廻り候処、裏垣根

内二八丈縞・^(マ)縮緬取交継々古女小袖袴捨有之候ニ付、地主紋右

衛門江申達近所承合候得共主出不申候間、入念心附置候旨栄太

郎相届申候、依之申上候、以上

四月廿六日

御中間頭

鈴木宇右衛門

右書面文言之内住居構内与認め最初差出候処 御目見以下二而八

居宅与認め候方可然旨御部屋伝与申聞候ニ付、認直し差出候事

右同文言ニ而末文附ケ 御本丸江彦通孝益を^(以脱カ)差出候事

(朱書)

〔右捨物御届振等取調ニ付承り合候例為見合留置〕

(朱引)

古沢茂右衛門手帳之内

文政十二丑年四月十二日周防守殿より撰津守殿江御渡、御同人田

中竜之助を以御下ケ

大御番

松平对馬守組

御手洗伊右衛門

拝領屋敷赤坂御門外

右伊右衛門屋敷之内当分西丸御書院番柴田出雲守組市岡鉄之助

江貸置申候処、去ル六日夕右鉄之助借地内江別紙之品捨有之候

ニ付色々詮議仕候処、其節麻布長坂辺より出火ニ而近所より致持

参候品ニ而も可有之哉与両三日見合置候得共心当り之者無御座、

(朱引)

右ニ付同九日出雲守方江鉄之助相届候段同日伊右衛門方江申越候由、伊右衛門私方江届申聞候、右捨有之候品如何可仕哉此段奉伺候、以上

丑四月

松平对馬守

右者西丸勤之もの借地内捨物之儀ニ付、西丸方ニ而見分可差遣品ニ有之候間、其趣を以御当番修理殿より周防守殿・撰津守殿江書面御返上被成候処、日数も延候義ニ付先ッ此度者 御本丸方より見分之者差遣可申旨被仰聞、又候書面御下ケ被成候ニ付此方ニ而見分可差遣旨修理殿被仰渡、其通り 御本丸方ニ而見分相済候事

一、借地之もの構内ニ捨有之候品之義、地借之ものより其筋江可相届筈之処、右之通地主より相届候者全手違之義ニ付、以来右様之義無之様地借之者江急度申談置候様加番左太夫申聞候ニ付、見分之者より其段右市岡鉄之助方江申談置候事

文政十二年七月廿五日

私組御鎗同心小林貫助拝領屋敷麻布狸穴、当時紅葉山火之番大竹左馬太郎江貸置申候処、右囲内江別紙之品書之通捨有之、昨朝見出し候ニ付右左馬太郎方より貫助方江昨夕申越候旨届申出候、依之此段御届申上候、且品々如何可仕哉奉伺候、以上

丑七月廿五日

御鎗奉行

能勢市十郎

西丸ニ而書拔候書面

一、文政二卯年十月六日

柳田玖右衛門組

西丸御小人

秋山七左衛門

拝領屋敷青山権田原三筋町

右七左衛門方歛壹挺捨有之

一、十月六日玖右衛門より西丸江御届出、即日御小人目付伊藤松次郎・塩沢小三郎見分三日晒申渡ス、三日相立主出不申候処右品今日中岩瀬伊与守方江持参可引渡旨、御小人目付柳川五左衛門申渡

一、右ニ付七日見分済届、九日晒済届西丸孫一郎殿江徳庵を以出ス、十日捨物町奉行御役宅江差出し候御届四郎兵衛殿江出ス

一、文政五年五月廿四日金子捨物同六月二日見分済

拝領屋敷阿部川町

近藤鯉左衛門組

五月廿四日伊八宅より出火慎申五月

西丸御小人

廿六日窓内江判金三百疋捨有之

須藤伊八

一、同年九月十三日下谷御徒町大縄地内、西丸御徒頭本目帯刀組塩田榮之丞地借西丸奥坊主稲村宗三構路次下水際ニ箆筈壹ッ捨有之、本目帯刀より御届ニ而西丸ニ而見分相済

一、文政六未年六月十四日下谷車坂下大縄之内、西丸御徒頭永井靱負組西丸御徒村瀬惣右衛門地借小普請彦坂近江守支配田代宗順門前下水之内ニ大小捨有之、永井靱負より御届ニ而西丸ニ而見分有之

一、文化十三年二月十六日

拝領屋敷

柳田玖右衛門組

四ツ谷西念寺横町

西丸御小人目付

右掃除ニ出候処構木戸内ニ刀・脇差捨有之候

右十六日御届西丸左京殿江久巴を以出ス、十七日三日晒申渡候

御届壹通ッ、西丸作左衛門殿・御本丸隼人殿江出ス、十九日主

出不申旨御届西丸但馬殿江出ス

御届申上候覚

一、私住居裏南之方垣根内ニ古はきく女小袖捨有之候由御届申上候処、今廿六日昼八時頃右為見分西丸御小人目付森澄鎌藏・豊田勇之助罷越、内膳正殿御下ケニ付当番御目付中根平十郎殿御差図ニ付見分ニ罷越候趣申聞、着類捨有之場所江見届品物相改、今廿六日より三日之間晒置可申旨申渡候ニ付受書差出申候、尤地主紋右衛門病氣ニ付倅官左衛門罷出無滞見分相済申候、依之御届申上候、以上

四月廿六日

藤村栄太郎 印

鈴木宇右衛門殿

口上書

一、昨廿四日朝六半時頃私庭掃除ニ罷出候処、裏南之方垣根内ニ古はきく女小袖忝ッ捨有之候ニ付、地主菊地紋右衛門方江為相知候得ハ、同人病氣ニ付倅官左衛門罷越様子見候而主も有之候哉与近所承合候得共主も無御座候ニ付、入念番人附置申候、尤其節怪敷者も見掛不申候、何時何方より持参投込候哉曾而不奉存候、此外相替義無御座候、以上

巳四月廿六日

御中間頭

鈴木宇右衛門組

西丸御小人目付

藤村栄太郎 印

森澄鎌藏殿
豊田勇之助殿

從西丸御当番御目付中被仰渡候者、裏南之方垣根内ニ捨有之候古はきく女小袖忝ッ今日より三日晒置、主出候共、主出不申候共、

西丸御当番御目付中江相伺可申旨奉畏候、以上

御中間頭

鈴木宇右衛門組

西丸御小人目付

藤村栄太郎 印

森澄鎌藏殿
豊田勇之助殿

巳四月廿六日

巳四月廿七日西丸御当番江忝通、同文之内以上不認末文附御本丸御当番江忝通出入

鈴木宇右衛門組

西丸御中間目付

藤村栄太郎

右栄太郎居宅裏垣根内ニ古継々女小袖忝捨有之候ニ付御届申上候処、昨廿六日西丸御小人目付森澄鎌藏・豊田勇之助罷越致見分、昨日より三日晒候上主出候共主出不申候共、西丸御当番御目付衆江相伺候様申渡候旨栄太郎相届申候、依之申上候、以上

四月廿七日

御中間頭

鈴木宇右衛門

右之通西丸御当番江御届申候間申上置候、以上

巳四月廿七日

御中間頭

鈴木宇右衛門

覚

一、当月廿六日御届申上候私居宅構内ニ捨有之候古女小袖忝ッ、即日西丸御小人目付兩人罷越見分相済、西丸御当番御目付中より右之品三日晒被仰渡候ニ付、昨廿八日迄三日之間晒置候処主出

不申候、依之奉伺候、以上

巳四月廿九日

鈴木宇右衛門殿

藤村栄太郎 印

巳四月廿九日西丸御当番江老通、同文言末文附 御本丸御当番江老通出ス

鈴木宇右衛門組
西丸御中間目付
藤村栄太郎

右栄太郎方ニ捨有之候古継々女小袖老ツ、西丸御小人目付見分之上申渡候通り、去ル廿六日より昨廿八日迄三日晒置候得共主出不申候間、奉伺候旨申出候、依之申上候、以上

巳四月廿九日

御中間頭
鈴木宇右衛門

右之通西丸御当番江御届申上候間申上候、以上

巳四月廿九日

御中間頭
鈴木宇右衛門

覚

一、今朝御届申上候私居宅構内捨有之候古縮緬継々女小袖老ツ、今廿八日迄三日之間晒置候処、主出不申候ニ付此段申上候処、今昼九半時頃西丸当御番御目付水野舍人殿より榊原主計頭御役宅江持參可致旨、御小人目付池野谷勇八申来候ニ付、依之御届申上候、以上

四月廿九日

鈴木宇右衛門殿

藤村栄太郎 印

從西丸御当番御目付中被仰渡候者、裏南之方垣根内ニ捨有之候古はきく女小袖老ツ三日晒置候得共主出不申候ニ付、今日中榊原主計頭御役宅江為持罷越相渡可申旨奉畏候、以上

巳四月廿九日

池野谷勇八殿

御中間頭
鈴木宇右衛門組
西丸御中間目付
藤村栄太郎

右栄太郎居宅構内ニ当月廿四日八丈縞・縮緬取交継々古女小袖老ツ捨有之候ニ付、同廿六日頭江相届候処即日御小人目付見分相濟、西丸御当番御目付中より三日晒被仰付候ニ付昨廿八日迄晒置候処、主出不申候ニ付奉伺候処、西丸御当番御目付水野舍人以差図持參仕候、以上

右栄太郎居宅構内ニ当月廿四日八丈縞・縮緬取交継々古女小袖老ツ捨有之候ニ付、同廿六日頭江相届候処即日御小人目付見分相濟、西丸御当番御目付中より三日晒被仰付候ニ付昨廿八日迄晒置候処、主出不申候ニ付奉伺候処、西丸御当番御目付水野舍人以差図持參仕候、以上

右栄太郎居宅構内ニ当月廿四日八丈縞・縮緬取交継々古女小袖老ツ捨有之候ニ付、同廿六日頭江相届候処即日御小人目付見分相濟、西丸御当番御目付中より三日晒被仰付候ニ付昨廿八日迄晒置候処、主出不申候ニ付奉伺候処、西丸御当番御目付水野舍人以差図持參仕候、以上

右栄太郎居宅構内ニ当月廿四日八丈縞・縮緬取交継々古女小袖老ツ捨有之候ニ付、同廿六日頭江相届候処即日御小人目付見分相濟、西丸御当番御目付中より三日晒被仰付候ニ付昨廿八日迄晒置候処、主出不申候ニ付奉伺候処、西丸御当番御目付水野舍人以差図持參仕候、以上

巳四月廿九日

持参人
藤村栄太郎

差添
御中間組頭
中山又吉

御役宅ニ而書替渡候書面写

天保四巳年四月廿九日

一、御中間頭鈴木宇右衛門申上候私組西丸御中間目付藤村栄太郎儀、本郷丸山菊坂町借地住居庭内ニ古縮緬・八丈継々小袖老捨有之候を、当月廿四日朝六半時頃見出候ニ付最寄御目付中江

申立候得者、同廿六日御小人目付見分之上右品三日晒置、主之有無相違候様被申渡候間晒置候得共、主出不申候ニ付尚又御目付中江相違候得者、当御番所江相納候様当御番御目付水野舍人差図ニ付則持参相納候由、右者栄太郎并御中間組頭中山又吉申来候

右捨物主計頭番所江納之

覚

一、先刻御届申上候捨物女小袖即刻榊原主計頭御役宅江持参仕、島左衛門江相渡申候、同人以差図筒井伊与守御役宅江罷越、与力蜂屋新五郎江右之段相届申候、依之奉申上候、以上

四月廿九日

鈴木宇右衛門殿

藤村栄太郎

覚

右居宅構之内江捨物差出ニ付

玄関取次

品物受取人

書替届

同承届

右之通御座候、以上

四月廿九日

巳四月晦日西丸舍人殿江忝通、同文言末文附忝通 御本丸主膳殿江出又

鈴木宇右衛門組

西丸御中間目付

藤村栄太郎

右栄太郎方ニ捨有之候古継々女小袖忝主出不申候ニ付昨廿九日申上候処、同日西丸御小人目付池野谷勇八罷越、右品榊原主計頭御役宅江持参引渡候様申渡候間即日持参いたし差出候処、同組与力島左衛門受取、右之趣認メ取候書付相渡、筒井伊賀守御役宅江持参候様申問候ニ付則罷越差出候処、同組与力蜂屋新五郎落手写留候上返渡候間、請取罷帰候段栄太郎并差添組役之者相届申候、依之申上候、以上

四月晦日

御中間頭

鈴木宇右衛門

右之通西丸御当番江申上候間申上置候、以上

四月晦日

御中間頭

鈴木宇右衛門

(朱書)
「式百廿七」

天保四巳年五月十六日御達書絵図面忝枚添、当番所速水左太夫より相達ス

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭・西丸共

江

明十七日紅葉山 御宮江 公方様 内府様 大納言様 御参

差添

中山又吉

詣之節、御当朝 公方様 大納言様御供一同ニ相廻居 大納

言様御供之分御玄関前・腰掛前并扉重御門外罷在 通御相済候

ハ、早速御供建可仕候、尤御供建・開共 公方様御同様之事

一、紅葉山御供建場・開場別紙絵図面之通ニ而右之趣申達候事

巳五月

山岡五郎作
羽太庄左衛門

右絵図面者紅葉山御石段之上御供建・開場計ニ而、此方者入用無
之ニ付写不申候事

同月同日速水左太夫より相達承付返却

一、明十七日紅葉山 御宮江 御同參之節 公方様 還御 大

納言様より御跡ニ付 公方様 還御御注進向中之口より申込

候間、同所御張紙下より御徒目付老人差出置坊主衆江御注進、

小札を以可申込事

但御駕籠台江者定例之通可申込事

一、大納言様 還御御注進 御本丸江御小人方御駕籠被為 召候由

右之御注進者当番所より可申込事

巳五月

山岡五郎作
羽太庄左衛門

(朱書)
「式百廿八」

天保四巳年四月廿六日月番主膳殿江壹通出入、同廿九日中務殿江
も口上ニ而相願置

覚

御切米

一、拾五俵

老人扶持

御抱入之者

鈴木宇右衛門組御中間

御旗指之者

関根市太郎

巳九拾歳

右市太郎儀安永三年十二月御中間明跡江身寄御抱入被 仰

付、当巳年迄御奉公六拾年無懈怠美体出精仕、御咎之儀も無御

座数年無滞相勤罷在候間、可相成御儀ニ御座候ハ、何卒御称美

被成下候様仕度、於私偏ニ奉願候、左様御座候得者自分組之者

共一統之励ニも相成、旁以難有仕合奉存候、此段奉伺御内意候、

以上

巳四月

御中間頭
鈴木宇右衛門

例書

御切米

一、拾五俵

老人扶持

御抱入之者

大林糸右衛門組

御中間

山本作次郎

下ケ札

山本作次郎儀文化十戌二五十五年

八十七歳与有之候間

文化十四丑二八五十八年

九十歳与奉存候

其後御譜代被 仰付候節

文政二卯年六十年

九十歳与有之

右之通ニ而文化十四丑年十月十五日御金被下候、御
書付ハ出可有之候得共、右之節御内意何何月上り候
哉相知不申候

御切米
一、拾五俵
御抱入之者

一人半扶持

末次佐吉組
御掃除之者
岡島幸次郎
子八拾歳

御奉公年数六拾三年

右幸次郎儀、数年出精相勤候ニ付御称美被成下候様仕度段文化
十三子年十月奉願候処、同年十一月為御褒美金三兩被下置候旨、
堀田撰津守殿御書付を以被仰渡候

山崎又兵衛組

御中間組頭

御切米
一、拾五俵

一人扶持

御譜代之者

近田半左衛門

午八拾貳歳

外二拾貳俵半扶持 役米

御奉公年数六拾年

右半左衛門儀、数年出精相勤候ニ付御称美被成下候様仕度段文
政五年年正月奉願候処、同年閏正月為御褒美金三兩被下置候旨、
内藤紀伊守殿御書付を以被仰渡候
右之通御座候、以上

巳四月

御中間頭
鈴木宇右衛門

安永三年年十二月廿八日

清水惣市組

小林彦次郎

同人從弟

関根市太郎

右跡抱可申渡旨石見守殿御附札を以被仰渡候段、吉十郎殿立合
吉十郎殿被仰渡致奉附返上

吉十郎殿被仰渡与有之候得共、本六郎右衛門殿加吉十郎殿
二而六郎右衛門殿申渡ニ可有之与奉存候

天保四巳年六月十日山崎廻状ニ申来

御目付江

金五兩

御中間
関根市太郎

右数年無懈怠出精相勤候ニ付為御褒美書面之通被下候間、其段
可被申渡候、被下金者御納戸頭相談可被請取候

右肥前守殿被仰渡候段市左衛門殿立合播磨守殿被申渡候ニ付、書
面繕付進達箱江入置候、明日御金御請取被成候後御返上可被下候

〔朱書〕
「式百廿九」

天保四巳年七月廿四日御達書懸り御小人目付を以被遣候間承付返
却

御中間頭江

口附御中間

六拾人

外ニ御供組頭

一人

右者明廿五日於浅草駒形両御番方・大御番方・新御番方・小普
請之面々馬川渡 内府様 上覧有之候間、書面之通御中間右
場所江明晩七時相揃、諸事前々之通相心得候様可申渡候、尤御
賦被下候事

七月廿四日

土岐主膳

(朱書) 〔式百三拾 式百三拾九番、式百三拾貳番為見合之事〕

天保四巳年八月 日懸り御使富山貞平を以被遣、四役承付返却

黒鍬之者頭

御中間頭

御小人頭

御駕籠之者頭

千三郎殿宮參之節御先御供罷出候もの人数取調、早々可差出候事

七月

佐橋市左衛門
大沢主馬

同八月 日御徒押より廻し来ル、五役承付当番所江返却

来月千三郎殿宮參御帰之節西丸御広敷江御立寄二付

一、御道筋窓蓋掛不申并並手桶不出、内二而物音不仕様いたし候事

一、御徒御道番無之、御通り少々御先江御小人目付罷越、辻番所々々

二而御通り之内人留候之事

一、御供・御先勤共衣服熨斗目半袴、熨斗目不着格合之者者服紗袴

麻上下着用之事

一、御城内外御番所頭并主人不及罷出組之者、役羽織着不致候事

一、御門々々其外辻番人頭之着服構無之、御目通江出候者計服機計(マ、マ)

服機相改、御帰之節者御受不及候事

一、御当日 殿中平服服機之儀、奥向・二丸御住居向・御同所御広

敷向計相改候事

一、御当日御太靴槽下御通り之節、御太靴打候時刻二相成候而も御

太靴差略いたし候之事

一、御供・御先勤之面々江(朱書)「吸物御酒被下」御酒御肴被下置候事(ミセケチ)

御目見以下江者御酒御肴被下置候事

但於西丸も右同断、尤両丸共於御台所被下候事

一、御供并山王・西丸・御広敷御先勤之分江も御賦被下候事

右之通伺相濟候二付相達候事

八月

佐橋市左衛門
大沢主馬

(朱書) 〔式百三拾壹〕

天保四巳年八月 日当番所より御使伊藤万之助を以差越、両役承

付返却

御中間頭江

御小人頭

去辰年十一月竹内五六左衛門勤役中、西丸御小人目付四人申渡

候処、向後本役之者明キ候節者見習之者有之候組筋二候ハ、

見習之者操上ケ書出し候様可致候、尤見習之者本役被 仰付候

跡之儀、其組筋二不限出精之者申渡候間其段相心得可申候、且

頭調之節者見習之者有之候ハ、操替、前条之通書上ケ、追而調

可申、若又本役被 仰付候跡矢張同組より見習申渡候義有之候

ハ、其後調之節見習之者除キ頭存寄之者調可申事

巳八月

(朱書) 〔式百三拾貳 式百三十番、式百三十九番為見合之事〕

天保四巳九月 日高倉助五郎相達入、四役承付返却

一、千三郎殿 御本丸江御入之節雨天ニ而濡御手当之儀、御入・御

婦・御往還之内雨降候ハ、濡御手当相願候様

但御供廻之節并御入中者雨降候共相願申間敷候事

一、西丸江御入之節も同断

但同断

一、外御出之節者御出より御帰迄之内雨降候ハ、濡御手当相願可申候

右之通讚岐守殿被仰渡候事

巳九月

(朱書)
「式百三拾三」

天保四巳年十二月七日懸りより差越承付返却

黒鍬之者頭

御中間頭 江
御小人頭

此度 銀之丞殿上野凌雲院江御葬送ニ付、組之者請取物御断

書面前々之御振合を以早々差出可申候

十二月

松平助之丞

同十一日御扣共三通掛り御徒目付近藤新吉を以出ス、尤 御簾中

様御養不被 仰候ニ付、肥後守殿御扣者人不申三通ニ而相済

〔平岡石見守殿

西丸御用

臨時

御細工所江御断

松平助之丞

覚

一、茶縮緬両面袷羽織 壹

御使組頭 壹人

但紐共

一、黒加賀絹袷羽織 貳拾壹

御中間目付 八人

一、黒絹単羽織 五拾八

御小人目付 八人

一、白衣 拾六

御中間押 三人

一、黒絹単羽織 五拾八

御小人押 三人

一、白衣 拾六

御中間 拾九人

一、黒絹単羽織 五拾八

御小人 三拾九人

右者 彩悦院殿御葬送御用ニ付書面之通請取申度奉存候、御細

工所江御断被仰渡可被下候、以上

巳十二月

御中間頭

右者文政十亥年十月覚性院殿之節之振合を以取調差出候事

一、右彩悦院殿者銀之丞殿事ニ而候

巳十二月七日御逝去、同月十日御出棺、未上刻上野凌雲院江

御葬送

御徒目付

(朱書)
「式百三拾四」

天保四巳年十二月廿五日山崎又兵衛当番之節御下ケ有之

御目付江

御中間

寺山久五郎

佐々木卯之助支配大筒下役組頭石井熊五郎出奔候、尋出候様可被申渡候

右大和守殿被仰渡候段讃岐守殿被申渡候ニ付、御書付鱒付返上可仕与存候処、寺山久五郎与申者名前聡与存知不申候間、御部屋友格江御書付預ケ置明朝御請可仕旨申置候処、中小共右名前相札明朝迄申聞候様同人申聞候段、又兵衛より廻状を以申越候ニ付取調候処、中小共右寺山久五郎与申名前之者無之、尤鈴木宇右衛門組ニ寺山佐七与申もの有之候得共、同人親類書ニ石井熊五郎与申もの書載無之、右之段翌廿六日御部屋友格江相咄し候処、御当番江明日直ニ申上候様同人申聞候ニ付、讃岐守殿江其段申上候処、尚相札明日申聞候様被仰聞候間、穿鑿之上左之通申上書差出候事

小日向金剛寺坂下水道端御持鍵同心内田金十郎地面

寺山佐七

古沢方組

田畑門之丞

寺山佐七次男ニ而御中間相勤居候旨

寺山久五郎

病死ニ付除キ有之

寺山佐七

佐七父寺山佐七二男ニ而石井利右衛門方江

石井長左衛門

婿養子ニ参り当時無役之由

大筒下役江次男抱ニ成候もの之由

石井熊五郎

夫より御弓矢方江出役いたし当四月廿二日

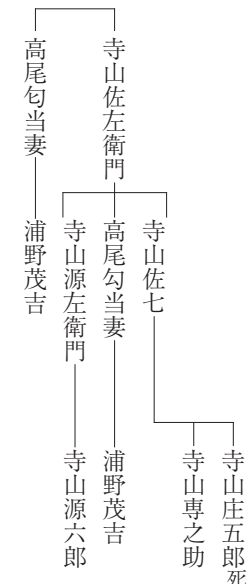
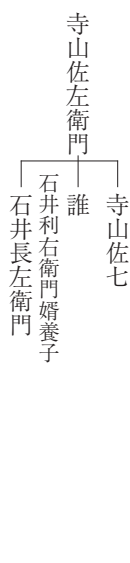
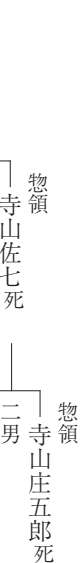
大筒下役組頭明跡江被 仰付

病死ニ付除キ候由

寺山庄五郎

牛込岩戸町南藏院前住居

右佐々木卯之助支配村田常藏相答候由



一、寺山久五郎

右之名面寺山家ニ一切無之

一、石井熊五郎

右者石井長左衛門弟ニ而新規抱ニ成候もの

一、石井長左衛門

右者寺山佐七之姉石井家江内々ニ而嫁し願濟ニ無之ものニ而、

右之長左衛門者養子ニ成り候もの之由、姉も先年死去いたし長

左衛門養父も死去いたし候由

一、石井熊五郎

佐七大病之節参り其後者参り不申、実之内々之もの

一、右熊五郎出奔いたし候旨佐七方江為知も無之、御届等いたし候
訳存知不申

一、右熊五郎宿所湯島かすがい町辺之由

一、右熊五郎何故出奔いたし候哉存不申候得共、妻之外女を連れ来り
候故右妻立腹いたし、夫より何故歎出奔之由風聞

御中間

寺山久五郎

右者御中間勤候内右之名面之者無御座、尤乍去御中間寺山佐七
与申者御座候ニ付相糺候処、此節老衰仕其上大病ニ而言舌相分
不申候処、石井熊五郎義内縁も有之候哉ニ御座候得共、表向親
類書ニ書出し無之候間琮与御答難申上、尤出奔仕候義佐七方江
為相知不申旨、佐七甥御中間寺山源六郎申聞候、以上

十二月

御中間頭

鈴木宇右衛門

(朱書)
「式百三拾五」

天保四巳年十二月 日平四郎殿当番所高倉助五郎を以御下ケニ
付、差支無之承知之旨答下ケ札いたし同人を以返上

前々二丸御風呂屋口平日締切ニ而火之番持ニ候由 御成被 仰出

候節者 御本丸御風呂屋口番人相廻り、其以後御用ニ而明キ候

得者二丸喰違御門番人見張之儀二丸ニ而申付 御本丸より御風

呂屋番人相廻り候得者引渡申候由、然ル処此節 千三郎殿御

引移以後、御同所御風呂屋口御門開閉之儀二丸奥坊主ニ而取扱、

見張之儀者詰合御庭之者相心得候処差支之儀も有之候間、以後

二丸新御門御同所御門番人・御中間方之内、御風呂屋口御門明
キ候節見張心得候様致度候、尤二丸 御成被 仰出候節者
前々之通御風呂屋口番人相廻り候得共、前後之処是又両所御門
番人之内見張心附候様致度候

右之通御門番人見張致候而も御差支之義無之候哉致承知度存候

十二月

内藤安房守

(朱書)
「式百三拾六」

天保四巳年正月廿三日古沢茂右衛門より申越

一、今日途中ニ而大久保熊次郎江逢候処同人申聞候者 大納言様紅

葉山 御宮江近日之内 御参詣ニ付、御先練之者服請取候義

ニ可有之、左候ハ、早々御断書面差出候様申聞候間、何レ受取

候心得ニ付早々差出候様可致旨答置候、尤去々卯年、去辰年四

月 大納言様 御参詣之節、御先練之者者 公方様御先練之

者ニ而折返し相勤候得共、此度者御別日 御参詣ニ付請取候旨

認メ可然旨熊次郎申聞候間、年番ニ而取調明後廿五日頃迄ニ差

出候方ニ存候旨申来候事

巳正月廿四日西丸大久保熊次郎江出ス、然ル処廿五日 御参詣御

沙汰止相成候ニ付、近日御日限被 仰出候節可差出旨熊次郎申聞

書面差戻ス

西丸御用

臨時

西丸御納戸江御断

覚

一、鬘斗目小袖 七ツ

但裏綿共

御先練御中間

七人

右者此度 大納言様紅葉山 御宮江被遊 御参詣候節為着候

二付、書面之通為請取申度奉存候、西丸御納戸江御断被仰渡可

被

下候

〔去ル卯年四月十七日、去辰年四月十七日紅葉山 御宮江

大納言様 御参詣之節御先練之者者 公方様御先練之者ニ

而折返相勤候ニ付着服請取不申候得共、此度者御別日被遊

御参詣候ニ付、本文之通申上候〕

以上

御中間頭

古沢茂右衛門

鈴木宇右衛門

山崎又兵衛

大納言様紅葉山 御宮江

御参詣之節、御先白張着之者

之儀ニ付奉伺候書付

御中間頭

御小人頭

大納言様供奉行列之節、御先白張着御中間・御小人紅葉山・山

王 御宮参被 仰出候節より 内府様御振合を以前々之通相心

得候様申渡置、文政十二亥三月紅葉山・山王 御宮参之節御供

仕候処、天保二卯年四月十七日、同三辰年四月十七日紅葉山

御宮江 御参詣被 仰出候節者 公方様 内府様御同参 還御

後 大納言様 御参詣被遊候旨被 仰出 大納言様御供方者

平常御供相心得候分相勤、供奉行列者 公方様供奉行列ニ而

折返相勤候様被仰渡候ニ付 御参詣之節平常相心得候分御供

仕、白張着之者者平常御供ニも無御座候間 公方様白張着之者

ニ而折返為相勤申候得共 大納言様御分者相心得罷在候ニ付、

右相心得候義者平常御供方も御同様之義与奉存候間、来ル十七

日 公方様 内府様御同参 還御後御引続 大納言様 御参

詣被遊候節、前文之御振合御座候ハ、 大納言様御分白張着

之者御供仕候様仕度奉存候、左候得者勤も相立候間此段奉伺候、

以上

正月

御中間頭
御小人頭

右書面者大久保熊次郎書取候而、此意味ニ而此方両役ニ而書面仕

立差出候方可然旨申聞差越候之処、評議之上正月者差出不申、四

月も先出し不申方可然与定メ候事

川崎弥市左衛門出し候旨山崎より廻し来

覚

一、来ル十七日紅葉山江

大納言様 御参詣ニ付御晴

一、黒加賀絹袷羽織

御中間目付・掛共 拾七

一、同

御中間押 五反

一、同

御持縫 五反

一、黒絹単羽織

野方御使 五反

一、同

野方御使 六反

右之通御座候、以上

正月十三日

〔朱書〕
「式百三拾七」

天明七未年二月御裏門番同心養子実方御中間江取戻之節、御中間頭より願書進達仕、双方江御附札を以被仰渡有之候例有之候間、近例願書四役進達不仕趣伺済ニ而も有之候哉之段、問合書御下被成候ニ付取調候処左之通御座候

宝曆十一巳年十二月

御中間・御小人組頭共養子願之儀、前々より私共吟味之上申渡来候、尤右之趣前々被仰渡も無御座、伺之儀も無御座、右之通只今以取扱来候、以上

巳十二月

御中間頭
御小人頭

右之通書付御目付長崎半左衛門殿江差出申候

寛政七卯年十二月

組之者養子願之儀、前々より頭共承置ニ而申渡候仕来ニ御座候、尤右養子離縁之節も右同断御座候

一、組之者次男・三男他向江養子ニ遣候節右同様ニ御座候、尤先方より進達致候由ニ候得共、私共方ニ而者前々より右之通之仕来

ニ御座候、右養子戻離縁之節も前条同様ニ御座候

但右両条共双方頭支配江掛合之上ニ而申渡候

卯十二月

例書

寛政六寅年御裏門同心久保田
平左衛門方江婿養子遣、取戻之節之例

平島西右衛門組
黒鉄之者
梅沢又市弟
梅沢甚蔵

右先方者進達此方承置ニ而相済候例能登守殿江差出候事

右之通書留有之候処、天明之度先役共如何相心得進達仕候哉、一向右等之訳申伝并書留等も相見不申候、外伺済等も分兼候得共、養子貫請并差遣之儀私共手限ニ而承届申渡、養子差戻・取戻之儀も右同様手限りニ而、先方者進達有之候而も私共方ニ而者進達不仕、前々仕来之通只今以承届申渡候、以上

〔朱書〕
「天保四」巳三月

四役

〔朱書〕
「式百三拾八」

天保四巳年四月 日老通御当番 殿江差出ス

覚

古沢茂右衛門組
御中間目付
岡本与十郎
鈴木宇右衛門組
御中間押
小宮山登一郎
高橋磯三郎
山崎又兵衛組
御中間目付
室田伝次郎

右之者共此度日光 御宮参詣罷越度旨申聞、日教九日御暇被下置候様相願申候間奉候、以上

巳四月

御中間頭
古沢茂右衛門
鈴木宇右衛門
山崎又兵衛

覚

古沢茂右衛門組
御中間目付

岡本与十郎
鈴木宇右衛門組
御中間押

小宮山登一郎
高橋磯三郎
山崎又兵衛組
御中間目付

室田伝次郎
杉山八之助組
御小人押

吉田金太郎

右之者共日光 御宮為參詣今朝六ツ時千住宿通出立仕候段相
届申候、依之申上候、以上

巳四月十三日

御中間頭
古沢茂右衛門
鈴木宇右衛門
山崎又兵衛
御小人頭
杉山八之助

覚

古沢茂右衛門組
御中間目付

岡本与十郎
鈴木宇右衛門組
御中間押

小宮山登一郎
高橋磯三郎
山崎又兵衛組
御中間目付

室田伝次郎

杉山八之助組

御小人押(マ)
吉田金三郎

右者日光 御宮參詣相濟、昨廿一日千住宿通帰府仕候旨相届
申候、依之申上候、以上

巳四月廿日(マ)

御中間頭
古沢茂右衛門
鈴木宇右衛門
山崎又兵衛
御小人頭
杉山八之助

(朱書)
「貳百三拾九 貳百三十番、貳百三十貳番見合事」

天保五午年正月廿四日 千三郎殿御供江御手当被下金、今日当番
所より小林八兵衛受取御使組頭江相渡、夫々為割渡候事

壹人前
金壹分壹朱

御小人目付 御知らせ御使 御持鑰 御草履取
三人 三人 貳人 拾人
御傘持 御挟箱持 御雨覆持 御駕籠之者・世話役共
貳人 四人 貳人 拾人

人数都合貳拾七人
金拾兩受取

右之外黒鍬之者江金三分被下候処、是者御小人目付より黒鍬組頭
江相渡候事
右ニ付取扱承り候処、当番所組頭より御徒目付与一紙手形ニ而請
取候由ニ候事

(朱書)
「式百四拾」

天保五午年八月七日春貞を以御扣共三通宇右衛門より出ス

御目付支配無役之者御切米御扶持方 月番 山岡五郎作
上り之儀申上候書付 村瀬平四郎

覚

御切米
一、式拾俵

耆人扶持

御目付支配無役
松岡銀藏

右銀藏儀当月三日御扶持人ニ不似合所業有之趣相聞候ニ付、御切米御扶持方被 召放候、依之御切米御扶持方上り之儀御勘定所江被仰渡可被下候、以上

午八月

御中間頭

同日御扣共三通例書壹通添前同人を以出ス

御目付支配無役之者拝領屋敷上り之儀申上候書付

月番

山岡五郎作
村瀬平四郎

覚

拝領屋敷本郷元町

御中間大繩之内

百式拾五坪余

御目付支配無役
松岡銀藏

右銀藏儀当月三日御扶持人ニ不似合所業有之趣相聞候ニ付、御切米御扶持方被 召放候、依之書面之拝領屋敷上り之儀町奉行江被仰渡可被下候、以上

午八月

御中間頭

例書

拝領町屋敷本所中之郷御中間

小林五兵衛組

新町御中間大繩之内

御中間

七拾貳坪余

鵜吉善藏

右善藏儀文政元寅年七月十九日勤向不宜場所不相応ニ付、御暇被下候ニ付屋敷上り之儀申上候、以上

午八月

御中間頭

同月七日御扣共式通前同人を以差出ス、同十四日答下ケ札いたし差越、文政度伊藤弥助之節之例ニ任せ承付返上不致、此方江沈いたし留置

町奉行衆

御勘定奉行衆

御勘定吟味役衆

御目付支配無役松岡銀藏儀当月三日御扶持被 召放候ニ付、上り地本郷元町百式拾五坪余、右者御中間大繩屋敷之儀ニ付取戻願差出可申奉存候、然ル処右地代引当ニ而銀藏借受有之候町会所金有之候由ニ付、右殘金返納之儀著此方ニ而引受皆済可致旨申上、取戻之儀可奉願奉存候、尤文化二丑年六月元御中間江守覚太夫上り地之節、会所金返納皆済迄余人江被下候義御見合有之候積、元御伺済之趣を以町奉行衆・御勘定奉行衆より御達有之、其節も此方ニ而引請返納之積申上、願之通組江御返しニ相成候、其後文政七申年十二月小普請伊藤弥助甲府勝手小普請被 仰付、町屋敷上り候節も御掛合之上右之振合を以取戻之儀申上、願之通組江御返しニ相成候間、此度も右之通仕度奉存候、御差支之儀も

無御座候哉、此段町奉行衆・御勘定奉行衆・御勘定吟味役衆江
御掛合被下候様仕度奉存候、以上

午八月

御中間頭

右之通御中間頭申聞候間及御掛合候、以上

午八月

山岡五郎作
村瀬平四郎

御書面元御目付支配無役松岡銀藏上り地面大縄屋敷之儀ニ
付、御中間頭より取戻願差出候積之処、銀藏儀右地代引当ニ
而町会所金借請有之候ニ付、右殘金返済之儀者御中間頭引受
皆済いたし候旨を以取戻願御進達有之候儀ニ候得者、於町会
所差支之筋無之候、此段及御挨拶候

午八月

同月十日孝益を以御下ケ、宇右衛門承付返上

山岡五郎作殿
村瀬平四郎殿

榊原主計頭

拝領町屋敷本郷元町
御中間大縄之内

百式拾五坪余

御目付支配無役
松岡銀藏

右銀藏儀御扶持被 召放候間、拝領町屋敷上り候ニ付請取可申
候間、明十一日四時晴雨共右場所江引渡人・立合之者御差出可
被成候

八月十日

受取人名前

榊原主計頭組与力 同組年寄同心 筒井伊賀守組与力 同組年寄同心
秋山久藏 服部嘉太夫 原 小太郎 永谷兵吉
地割役 町年寄手代 地割手代
樽屋三右衛門 阿部潤平 野村惣兵衛
林忠右衛門

覚

拝領町屋敷本郷元町
御中間大縄屋敷内

百式拾五坪余

御目付支配無役
松岡銀藏

右銀藏御扶持被 召放候ニ付拝領町屋敷上り候間、昨十一日榊
原主計頭組与力秋山久藏・筒井伊賀守組与力原小太郎右兩人江
地面引渡候旨組役之者申聞候、依之申上候、以上

八月十二日

御中間頭

古沢茂右衛門
鈴木宇右衛門
山崎又兵衛

同月十五日御扣共三通差出、同十九日願之通大縄屋敷御返被下候旨
相模守殿被仰渡候段、平四郎殿立合小四郎殿被申渡書面繕付返上

願之通大縄屋敷御返被下候旨被仰渡
奉承知候
御中間頭
鈴木宇右衛門

午八月十九日

御中間大縄屋敷取戻之儀
奉願候書付

月番

山岡五郎作
村瀬平四郎

覚

拝領屋敷本郷元町

百貳拾五坪余

元御目付支配無役

松岡銀藏

右銀藏儀此度御扶持被 召放町屋敷上り地ニ相成申候、右者御
中間大縄屋敷ニ御座候間、先格之通御中間組江御返被下候様奉
願候、以上

午八月

御中間頭

古沢茂右衛門

鈴木宇右衛門

山崎又兵衛

下ケ札

本文松岡銀藏儀拝領町屋敷上り高を以町会所金借用有之候
ニ付、残金返納此方江引請皆済可為仕候間、取戻之儀奉願
候而も差支之義無之哉之旨、町奉行・御勘定奉行・御勘定
吟味役江及懸合候処差支之儀無之旨申聞候間、取戻願之通
被 仰付被下候様仕度奉存候

午八月四日壹通御当番市左衛門殿江閑嶋を以出ス

御目付支配無役

松岡銀藏

御扶持人ニ不似合所業有之趣相聞候ニ付、御切米御扶持方 召
放之右之通被仰渡候、依之申上候、以上

八月四日

御中間頭

無役世話役

同月十三日近藤勝平より用役岡田利八郎を以差越ス

五郎八事
松岡銀藏

右五郎八儀去ル六月廿五日銀藏与改名致し候趣金田毅負手代森
川熊五郎江申談候処、委細承知之旨申聞、御添状相廻り候節者
五郎八与申書面之脇江銀藏与相認、帳面相消可申旨右熊五郎申
聞候

〔朱書
為見合留置〕

〔朱引〕

御小人御仕置之者屋敷家作
之儀申上候書付

覚

月番

横田十郎兵衛
松前主馬

大縄ニ而拝領屋敷
浅草阿部川町

畔柳助四郎組

御小人目付

松村久五郎

同人組

同断

小松崎助次郎

右之者共於佐州重追放被 仰付候、依之屋敷并家作差上申度
奉存候、町奉行衆・小普請奉行衆江被仰渡有之候様仕度奉存
候、屋敷之儀者大縄之内ニ御座候間、前々之通組之者之内無
屋敷之者ニ拝領為仕度奉存候、以上

申二月

御小人頭

荒井忠次郎

川村嘉吉

一、先年御扶持被 召放之砌之例ニ階御礼日記操見候処、此方よ
り御切米上り申上無之、尤是八町奉行所ニ而申渡有之候間申

(朱引)

上無之筈、此度ハ如何可有之哉、先年伊内源太郎御暇之節振合左之通

岩崎伝兵衛組
御小人目付
伊内源太郎

勤向不宜場所不相応ニ付御暇可被申渡候

十月三日

右文政十亥年十月三日肥後守殿被仰渡候段伊賀守殿被申渡、書面鱒付返上、同月十一日御切米上り申上、御扣共三通月番伊賀守殿江差出

天明五巳年十一月十二日

一、高橋覚太夫組中川和助昨十一日御扶持被 召放候旨山村信濃守於宅申渡

右御届書御当番修理殿江出又

一、右ニ付父同組中川覚左衛門押込伺并覚太夫差扣伺前御同人江出又

一、同十三日覚太夫差扣伺不及其儀旨、御附札を以対馬守殿被仰渡候段頼母殿被申渡

一、中川覚左衛門押込伺番遠慮可申渡旨、御附札を以前同断被仰渡同月廿一日

一、中川和助跡抱伺頼母殿江出、同月廿六日永越彦次郎倅太吉跡抱可申渡旨対馬守殿被仰渡候段、喜内殿立合善左衛門殿被申渡

同十二月十八日

一、中川覚左衛門番遠慮可差免旨、対馬守殿御書附を以被仰渡候段勝次郎殿被申渡

(朱書)
「式百四拾壹」

天保五年八月廿六日山崎又兵衛当番之節廻状ニ申越

一、汐見坂御門御中間・御小人頭組とも相通り候元西丸中務殿御用

万兵衛より太吉郎を以承りニ参候間、寛政二戌年十一月廿八日

頭并組頭とも見廻り之ため御断有之、御門々々江者二月三日ニ

御断相廻り、猶又文政元寅年十月頭并家来組頭とも御断有之候

ニ付其段太吉郎江申談、同人方ニ而取調申上候旨申聞候、組之

者者赤門・裏締戸之外者有之間敷赤門江藤四郎を以申談置候、

明日ニも知レ次第太吉^(郎脱力)迄組頭より申達候積御座候、御当番之節

宜御取計可被下候

(朱書)
「式百四拾貳」

天保五年十月 日 殿被仰渡候段 殿立合 殿被申渡

御目付江

近藤美三郎拜領屋敷

浅草元三十三間堂跡

百式拾坪

御中間

平井勝右衛門江

平井勝右衛門拜領屋敷

小石川白山御殿跡中通り

百八坪

小普請組

中山信濃守組

近藤美三郎江

右願之通屋敷相對替被 仰付候、御普請奉行可被談候

(朱書)
「式百四拾三」

寛政二戌年二月十日勘三郎殿幸七を以被遣、高橋覚太夫承付返上

書面之御玄関番中之口番助仮役之儀以来可
相止旨伺之通被仰渡奉承知候

二月十日

桑原善兵衛
中川勘三郎

御玄関番中之口番之内、年来御奉公出精相勤候者之悴部屋住勤
之者御玄関番中之口番助仮役之義、別書之通天明三卯年山川下
総守御目付勤役中相伺候処伺之通被 仰付、定人数之外ニ仮役
六人申渡置、其節之父共病死仕候後者父之本役ニ操上、悴仮役
跡江者両役之内ニ而出情之者之悴仮役之義伺之上申渡来候、然
ル処右両役之儀者惣御小人共之願候場所ニ御座候処、前書申上
候通父之跡江仮役より操上ニ相成、又其跡江仮役申渡候而者両
役之内を相願居候惣御小人共之障リニ相成、氣請不宜義ニ御座
候、勿論仮役無之候而も定人数ニ而手足り不申儀も無御座、殊
ニ先達而西丸より被召連候両役当時打込勤ニ而、過人も有之旁
御差支無御座候間、右仮役之儀者以来相止可申奉存候、尤此節
仮役相勤居候者共儀者父転役歟、病死仕候ハ、父之跡江本役申
渡、仮役者明キ減切ニ仕、定人数ニ相成候迄者御入人之儀申上
間敷奉存候、依之奉伺候、尤一同評議仕候処書面之通御座候、
以上

二月

桑原善兵衛
中川勘三郎

(朱書)
「式百四拾四」

天保五年九月四日壹通弁佐を以五郎作殿江差出ス

山崎又兵衛組
御中間
三浦八五郎

右者一昨二日御留守居同心被 仰付候処、当病ニ付快氣次第申

渡其節可申上候、以上

午九月四日

御中間頭
山崎又兵衛

同年十月 日御扣共三通例書壹通添差出ス

御中間三浦八五郎御留守居同心被 仰付
候処当病ニ付御断返申上候書付

戸川
羽太

覚

山崎又兵衛組

御中間

三浦八五郎

右八五郎儀当九月二日御留守居同心被 仰付候ニ付可申渡候、

当病ニ付御届申上、其後種々療治仕候得共兎角同篇ニ而急ニ出

勤可仕躰無御座候、依之此段御届申上候、以上

御中間頭

山崎又兵衛

午十月

例書

覚

中山金三郎組

黒楯之者

小池吉五郎

右吉五郎儀文政四年四月六日西丸御休息御庭之者被 仰付候ニ

付可申渡候、当病ニ付御届申上、其後種々療治仕候得共兎角同篇

急ニ出勤可仕躰無御座候ニ付、同年五月六日御断返申上御月番江

差出申候

御目付支配無役
木村紋次郎

右文政元寅年十一月十二日 御台様仕丁被 仰付、病氣ニ付
御断返卯二月出

近藤鯉左衛門組
黒鉄之者
笹間清五郎

右清五郎儀文政十亥年十月四日御休息御庭之者被 仰付候処、
病氣ニ付御断返同年十一月四日差出

右之通御座候、以上
午十月 御中間頭
山崎又兵衛

(朱引)

(朱書)
「為見合留置」

右者昨六日西丸御休息御庭之者被 仰付候処、当病ニ付快氣次
第申渡、其節可申上候、以上

巳四月七日 黒鉄之者頭
中山金三郎

右壺通四郎兵衛殿江出ス

黒鉄之者小池吉五郎西丸御休息御庭之者 月番 神尾市左衛門
被 仰付候処、病氣ニ付御断返申上候書付 酒井作右衛門

覚

中山金三郎組
黒鉄之者
小池吉五郎

右吉五郎儀当四月七日西丸御休息御庭之者被 仰付候ニ付可申
渡処、病氣ニ付右之段御届申上、其後種々療治仕候得共兎角同
篇ニ而急ニ出勤可仕躰無御座候、依之御届申上候、以上

文政四巳年五月 黒鉄之者頭
中山金三郎

右三通五月六日神尾市左衛門殿江口上添出ス、凡三十日程見合差
出候事

(朱書)
「式百四拾五」

天保五年十一月二日御扣共式通別紙壺通相添御部屋雲弥を以差
出ス

御中間類焼御届 山岡五郎作
覚

宿所浅草堀田原秋元忠右衛門組 鈴木宇右衛門組
御徒鯨井克之助地面之内借地 御中間 壺 人

右者一昨晦日夜五半時頃浅草堀田原辺より出火ニ而居宅類焼仕
候ニ付御届申上候、以上

午十一月二日 御中間頭
鈴木宇右衛門

右定例休之義申上書壺通名面ニ而申上候得共、右類焼人柏原滝三
郎者御吟味中同道人預ケ之ものニ付、休之義申上者不致候事

覚

宿所浅草堀田原秋元忠右衛門組

御徒鯨井克之助地面之内借地

鈴木宇右衛門組
御中間
柏原滝三郎

右滝三郎儀御吟味中同道人江預返候旨、六月廿一日於榊原主計

頭御役宅申渡有之候者ニ御座候処、一昨晦日夜五半時過頃浅草

堀田原辺より出火ニ而居宅類焼仕候間、宅番之者差添浅草阿部

川町家主治兵衛店当分之内借受為立退候旨相届候、尤主計頭御

役所江者組役之者を以相届申候、依之申上候、以上

午十一月二日

御中間頭
鈴木宇右衛門

右差出候処例者無之哉之旨御部屋申聞候ニ付無之旨相答候処、其

後何之沙汰無之相濟候事

同日榊原主計頭御役宅江組頭中山又吉持参差出、与力三村吉兵衛

受取

覚

宿所浅草堀田原秋元忠右衛門組

御徒鯨井克之助地面之内借地

鈴木宇右衛門組
御中間
柏原滝三郎

右滝三郎儀御吟味中同道人江御預之旨被仰渡慎罷在候処、一昨

晦日夜堀田原辺より出火ニ而居宅類焼仕候間、仲ヶ間共差添浅

草阿部川町家主治兵衛店当分之内借受為立退申候、依之御届申

上候、以上

十一月二日

御中間組頭

(朱書)
「式百四拾六」

天保五午年四月七日御扣共三通小札式枚付、御部屋弁佐を以差出ス

御中間忝人御切米御扶持方

上り候ニ付御勘定所江御断

覚

御切米

一、拾五俵

忝人扶持

鈴木宇右衛門組

御中間

川野善太夫

右善太夫儀文化八未年六月父長兵衛次男ニ而新規御抱入被 仰

付候者ニ而、病死又者病氣ニ而御奉公難相勤節者、御切米御扶

持方差上候様被仰渡候者ニ御座候処、先達而兄病氣ニ付惣領除

ニ相成次男惣領ニ申渡、此度父家督被下置候ニ付御切米御扶持

方上り申候間、御勘定所江御断被下候様仕度奉存候、以上

午四月

御中間頭
鈴木宇右衛門

右差出候処先例承り度旨御部屋申聞候間、左之通認差出ス

神谷兵太夫組

御中間

佐藤常三郎

右常三郎儀享和二戌年十一月新規御抱入之者ニ御座候処病氣ニ

付御暇申渡候ニ付、御切米御扶持方上り之儀御勘定所江御断書

面文政三辰年五月土方八十郎殿江差出申候、以上

午四月

御中間頭

(朱書)
「式百四拾七」

天保六未年正月十三日巷通御当番 殿江出入

覚

拝領町屋敷

本郷丸山菊坂町

御中間大縄屋敷之内

百五拾六坪余

山崎又兵衛組

元御中間

深谷儀助

右儀助義江戸払被 仰付候ニ付拝領町屋敷上り候間、昨十二日

榊原主計頭組与力松浦栄之助・筒井伊賀守組与力佐野吉次郎、

右兩人江地面引渡候旨組役之者申聞候、依之申上候、以上

正月十三日

御中間頭

山崎又兵衛

同年正月十六日御扣共式通御月番勝次郎殿江出入、同五月三日答下ケ札いたし来ル、庄左衛門殿御下ケ

町奉行衆

御勘定奉行衆

同吟味役衆

元御中間深谷儀助儀江戸払被 仰付候ニ付、上り地本郷菊坂町

百五拾六坪余、右者御中間大縄屋敷之儀ニ付取戻願差出可申奉存

候、然ル処右地代引当ニ而儀助借受有之候町会所金有之由ニ付、

右殘金返納之儀者此方ニ而引受皆済可致旨申上、取戻之儀可奉願

奉存候、尤文化ニ丑年六月元御中間江守覚太夫上り地之節、会所

金返納皆済迄余人江被下候義御見合有之候積、元御伺済之趣を以

町奉行衆・御勘定奉行衆より御達有之、其節も此方ニ而引受返納

之積申上、願之通組江御返ニ相成候、其後去年八月御目付支配無

役松岡銀藏御扶持被 召放、町屋敷上り候節も御懸合之上右

之振合を以取戻之儀申上、願之通組江御返ニ相成候間、此度も右

之通仕度奉存候、御差支之儀も無御座候哉、此段町奉行衆・御勘

定奉行衆・御勘定吟味役衆江御掛合被下候様仕度奉存候、以上

未正月

御中間頭

右之通御中間頭申聞候間及御掛合候、以上

未正月

曲淵勝次郎

羽太庄左衛門

御書面元御中間深谷儀助上り地面大縄屋敷之儀ニ付、御中間頭より取戻願差出候積之処、儀助儀右地代引当ニ而町会所金借受有之候ニ付、右殘金返納之儀者御中間頭引受皆済致候旨を以取戻願御進達有之候義ニ御座候得者、於町会所差支之義無之候、此段及御挨拶候

未五月

榊原主計頭

筒井伊賀守

土方出雲守

中川忠五郎

未五月七日御月番播磨守殿江御扣共三通例書巻通添差出入

御中間大縄屋敷取戻

月番

之儀奉願候書付

戸川播磨守

覚

村瀬平四郎

拝領町屋敷

本郷菊坂町

百五拾六坪余

山崎又兵衛組

元御中間

深谷儀助

右儀助儀此度江戸払被 仰付町屋敷上り地ニ相成申候、右者御中

間大縄屋敷ニ御座候間、先格之通御中間組江御返被下候様奉願候、以上

未五月

御中間頭
山崎又兵衛
伊倉為八
小野弥兵衛

本文深谷儀助儀拝領町屋敷上り高を以町会所金借用有之候ニ付、残金返納此方江引受皆済可為仕候間、取戻之儀奉願候而も差支之義無之哉之旨、町奉行・御勘定奉行・御勘定吟味役江及掛合候処、差支之儀無之旨申聞候間、取戻願之通被 仰付被下候様仕度奉存候

例書

覚

御目付支配無役
松岡銀蔵

右銀蔵儀御扶持被 召放拝領町屋敷上り地ニ相成候処、御中間大縄屋敷ニ付同年十月願之通元組江御返被下候旨相模守殿被仰渡候

未五月

御中間頭
前三名

拝領町屋敷
本郷菊坂町
百五拾六坪余
元御中間
深谷儀助
右儀助此度江戸払被 仰付候ニ付町屋敷上り候処、先格之通御

中間組江御返被下候
右肥後守殿御渡、五郎作殿立合播磨守殿被仰渡候

未六月廿二日

同七月十一日御当番江巻通御部屋宗甫を以出ス

覚

拝領屋敷本郷菊坂町
百五拾六坪余

元御中間
深谷儀助

右上り屋敷御中間組江御返被下候間、昨日筒井伊賀守組与力中田新太郎・榊原主計頭組与力谷村喜平次兩人罷出、地面引渡候ニ付請取候旨組役之者申聞候、依之申上候、以上

未七月十一日

御中間頭
小野弥兵衛

(朱書)
「式百四拾八」

天保六未年五月十四日御達五役承付返上

御徒目付組頭
黒嶽之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

支配向御台所被下分當時定御断人数相札、席々并朝夕夜之分認メ分不洩様書付可差出候、尤西丸向之分ハ相除候事
五月
山岡五郎作

同六月八日当番所組頭小野伝左衛門江差出ス

日々御台所被下分

一、御中間頭

一、御小人頭

御中間方

一、御供組頭

一、野方御使之者

一、奥表仕切土戸番

一、御太鞍槽下土戸番

一、奥御台所前御門番

一、裏締戸番

一、二丸御広敷御門番

一、同裏締戸番

一、同御長屋御門番

一、同御台所脇御長屋御門番

一、同新御門番

一、御用方

一、昼番

御用除

御小人方

一、御使組頭

一、御中間目付

一、御小人目付

三之間御縁類

夕壹人

夕壹人

四之間

夕壹人

夕四人

朝夕弐人

朝夕夜三人

同断

同断

同断

同断

同断

同断

夕六拾人

四之間

朝夕夜壹人

当番

朝夕夜八人

御供扣

夕三人

御用方

夕五拾六人

一、御草履取役

一、御中間押合

一、御小人押合

一、御風呂屋口番

一、御使之者

御用方

一、触番より

御用除

二丸詰

一、御中間目付合

御小人目付合

一、中之口番

一、堀重御門番

一、御使之者

大納言様御用

一、御持鍵役

一、野方御使之者

一、御長刀役

一、御小道具役

千三郎殿御用

一、御持鍵役

一、野方御使之者

御中間目付合

御小人目付合

一、御草履取役

朝壹人
夕弐人
夜壹人

朝夕夜弐人

同断

当番

朝夕夜拾人

夕五拾五人

夕拾三人

朝夕夜弐人

同断

同断

同断三人

同断

朝夕四人

同断弐人

朝夕夜壹人

同断五人

朝夕弐人

同断

朝夕夜三人

同断壹人

一、御使之者

御城内 御成之節
一、御供扣御小人

同断六人
朝夕六人

右者日々御台所御断差出申候
右之通御座候、以上

未六月
御中間頭
御小人頭

(朱書)
「式百四拾九」

天保六未年五月十八日式拾壹人明キニ而御入人願・御扣共三通例
書尙通添御月番播磨守殿差出候処、同日無役より御入人兩人有之
候ニ付、差引拾九人明キ相成候間認直し同月廿四日前御同人江差
出ス

御中間江御入人之儀奉願候書付
月番 戸川播磨守
村瀬平四郎
覚

御中間御定人数五百五拾五人
内当時明キ 拾九人

右之通追々明キ出来仕候ニ付、平日諸出方御人手足り不申候処、
種々作略仕可成御間ニ合せ候得共、此上出方多之節者手足不申
候間、何卒御定人数高ニ御入人被 仰付被下置候様奉願候、以
上

未五月
御中間頭
山崎又兵衛
伊倉為八
小野弥兵衛

例書

覚

御中間御定人数拾貳人不足仕候ニ付、文政十三寅年閏三月御定
人数高ニ御入人奉願候処、同年六月新規御抱入拾貳人被 仰付
候旨堀田撰津守殿被仰渡候

未五月
御中間頭

五月廿四日尙通播磨守殿江差出ス

文政十三寅年六月御中間御定人数高ニ御抱人被 仰付候後
明キ高訳書

高拾五俵壹人扶持
山崎又兵衛組
御中間 岡田此次郎

天保四巳年十二月晦日西丸切手御門番同心被 仰付候

高拾五俵壹人扶持
同断 山崎茂作

天保五午年十二月九日御目付支配無役被 仰付候

高拾五俵壹人扶持
伊倉為八組
御中間 眞壁辰五郎

天保四巳年五月三日御目付支配無役被 仰付候

高拾五俵壹人扶持
同断 小野彦太郎

天保四巳年六月廿二日西丸御台所小間遣被 仰付候

高拾八俵壹人半扶持
同断 小林金次郎

天保五午年三月六日御目付支配無役被 仰付候

高拾七俵壹人半扶持
高拾五俵壹人扶持

同断
河内惠三郎
浅井留吉

右兩人共天保五午年九月二日御留守居同心被 仰付候

高拾五俵壹人扶持

同断
望月忠藏

天保五午年十一月十七日御先手同心被 仰付候

高拾五俵壹人扶持

同断
目黒十次郎

天保六未年三月十六日御目付支配無役被 仰付候

高拾五俵壹人扶持

小野弥兵衛組
御中間
成島惣次郎

文政十三寅年九月十一日御目付支配無役被 仰付候

高拾五俵壹人扶持

同断
鹿島惠一郎

天保二卯年十月晦日御目付支配無役被

仰付候

高拾五俵壹人扶持
高拾五俵壹人扶持

同断
今井清次郎
神谷重藏

右兩人共天保三辰年六月朔日御裏門切手番同心被 仰付候

高拾五俵貳人扶持

同断
上村市五郎

天保三辰年十月四日御目付支配無役被

仰付候

高拾五俵壹人扶持
高拾五俵壹人扶持

同断
飯塚富次郎
小林忠次郎

右兩人共天保三辰年十二月廿九日御留守居同心被 仰付候

高拾五俵壹人扶持

同断
小幡兼三郎

天保四巳年六月廿九日村松万藏支配御口之者被 仰付候
同断
山本善平

高拾五俵壹人扶持
天保四巳年十月廿八日御目付支配無役被 仰付候

高拾五俵壹人扶持
同断
川野善太夫

天保五午年四月六日父家督被下置候二付、御切米御扶持方
上り申候

高拾五俵壹人扶持
同断
佐々木益之丞

天保五午年八月廿日病氣二付御暇被下置候

高拾五俵壹人扶持
同断
加藤栄之丞
秋元源之助

右兩人共天保五午年九月三日御留守居同心被 仰付候

高拾五俵壹人扶持
同断
鈴木伝次郎
宇佐美勇吉

右兩人共天保五午年十月御目付支配無役被 仰付候

高拾五俵壹人扶持
同断
高橋栄次郎

右之通御座候、以上
天保六未年四月廿三日諏訪部鎌五郎支配御口之者被 仰付候

未五月
御中間頭

五月廿四日式通播磨守殿江差出入

覚

御中間御定人数
五百五拾五人

内

御役出之者 拾人
無役入之者 七人
御切米上り之者 貳人

都合拾九人明キ

此明キ高三百五俵貳拾壹人扶持

右之通御座候、以上

未五月

御中間頭

五月廿四日御月番播磨守殿江式通例書式通添差出ス

御中間新規御抱入奉願候性名書

月番

覚

御奉公年数三拾年

山崎又兵衛組御中間
善右衛門三男
鈴木斧吉
未貳拾五歳

御奉公年数貳拾五年

柳弥市郎甥
白井吉太郎
未拾七歳

御奉公年数五拾八年

伊倉為八組同断
仁兵衛次男
平山清太郎
未貳拾歳

御奉公年数貳拾五年

同人組同断
久八次男
伊藤鋏太郎
未拾七歳

御奉公年数貳拾年

同人組同断
新兵衛弟
金枝仙四郎
未貳拾四歳

御奉公年数拾五年

同人組同断
八十郎弟
山田源之助
未貳拾貳歳

御奉公年数拾貳年

同人組同断
加藤源内甥
渡辺兼三郎
未拾七歳

御奉公年数拾貳年

同人組同断
次郎右衛門甥
佐藤幸五郎
未拾七歳

御奉公年数三拾四年

小野弥兵衛組同断
与惣右衛門次男
渡辺相吉
未拾七歳

御奉公年数拾八年

同人組同断
平吉弟
小林平太郎
未貳拾五歳

御奉公年数貳拾四年

同人組同断
瀬平弟
横川吉太郎
未貳拾七歳

御奉公年数貳拾年

同人組同断
又十郎弟
浅見金三郎
未貳拾歳

御奉公年数三拾九年

同人組同断
紀平次次男
神谷熊三郎
未貳拾貳歳

御奉公年数貳拾八年

同人組同断
讚三郎弟
平井覚次郎
未三拾貳歳

御奉公年数式拾八年

同人組同断
利惣次弟
鳥貝鉄四郎
未式拾八歳

御奉公年数三拾三年

同人組同断
市蔵次男
羽田正之助
未拾七歳

御奉公年数拾五年

同人組同断
次右衛門弟
神尾斧三郎
未拾七歳

御奉公年数式拾年

同人組同断
松五郎弟
朝倉金之助
未三拾歳

御奉公年数拾八年

同人組同断
市右衛門四男
深谷金次郎
未拾七歳

右之者共御奉公可相勤相应之者ニ御座候、以上

未五月

御中間頭
山崎又兵衛
伊倉為八
小野弥兵衛

例書

文政十三寅年四月八日御中間新規御抱入願差出候処、同年六月十六日御中間次男・三男・甥拾式人、並高拾五俵老人扶持ニ而新規御抱入被 仰付候旨撰津守殿被仰渡候、以上

未五月

御中間頭
山崎又兵衛
伊倉為八
小野弥兵衛

同年七月廿四日永井肥前守殿御書付を以被仰渡候段、石河数馬殿立合羽太庄左衛門殿被申渡

御目付江

善左衛門三男
鈴木斧吉
柳弥市郎甥
臼井吉太郎
仁兵衛從弟
平山清太郎
久八次男
伊藤鉄太郎
新兵衛弟
金枝仙四郎
八十郎弟
山田源之助
加藤源内甥
渡辺兼三郎
次郎右衛門甥
佐藤幸五郎
与惣右衛門次男
渡辺相吉
平吉弟
小林平太郎
瀬平弟
横川吉太郎
又十郎弟
浅見金三郎
紀平次次男
神谷熊三郎
讚三郎弟
平井覺次郎
利惣次弟
鳥貝鉄四郎
市蔵次男
羽田正之助

右之者共御中間明跡江抱入可被申渡候、勤候内並之通御切米御扶持方被下候間、其段茂可被申渡候

次右衛門弟
神尾斧三郎
松五郎弟
朝倉金之助
市右衛門四男
深谷金次郎

同日右同断

御目付江

此度御中間江新規抱入候者共病死又者病氣ニ而御奉公難相勤節者、其度々御切米御扶持方差上候様可被致候、尤以来紛敷無之様可被心得候

覚

此度御中間江新規抱入候者共病死又者病氣ニ而御奉公難相勤節者、御宛行上り候得共厄介等有之、実々取続難儀之趣相違も無之者其節々糺之上、又新規抱入之積其訳認可被相伺候、妻子等も無之厄介無之分者跡抱者難成候、諸事前々御中間身寄之者抱入之節之通可被心得候事

(朱書)
「式百五拾」

天保六未年九月 日小四郎殿被遣候旨高倉助五郎相達ス、三役承付返上

初之丞殿二丸御住居江御引移後御供西丸より相廻候得共、非常

(朱書)
「式百五拾壹」

之節者 御本丸ニ而御供心得、早々相廻り候様向々江御達可有之候、尤 御本丸より御供相廻り候後、西丸より御供相廻り差支無之様代り合致候義者不苦候、此段御達申候、以上

九月 内藤安房守

天保七申年五月 日当番所生駒藤蔵より差越、五役承付返却

御徒目付組頭

黒楯之者頭

御掃除之者頭

御中間頭

御小人頭

諸席御台所頂戴之儀、定御断無之御用ニ而罷出候節、臨時御断ニ而頂戴致来候役々、尤壹ヶ年ニ壹両度罷出頂戴仕候向共、席々之訳且朝夕夜食之分都而臨時之御断致候役々、取調之儀被仰渡候ニ付、定御断之外臨時御断ニ而被下候、支配向共巨細ニ取調可申聞事

五月 山岡五郎作
大沢主馬

同月 日壹通当番所小川伊兵衛を以差出ス

覚

三之間御縁頬

黒楯之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

四之間 右組之者

右者定御断之外御用ニ而罷出候節、朝夕御夜食共御台所臨時御断差出頂戴仕候、以上

申五月

黒楯之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

(朱書)
「式百五拾式」

天保七申年五月 日差出入、同六月十八日肥後守殿御附札を以被仰渡候段、五郎作殿立合平四郎殿被申渡、書面鱒付返上

覚

拝領町屋敷
本所永倉町

五拾九坪六合三勺

松村平次郎

同断
同断

同断

吉田満之助

同断

中之郷御中間新町

八拾八坪

神谷藤助

同断
同断

七拾貳坪六合

栗原小太郎

同断

七拾貳坪五合

福谷平左衛門

右五ヶ所先年御咎出奔ニ而上り地ニ相成申候、右者御中間組江

御返被下候様奉願候、以上

申五月

御附札

町奉行江申渡候間可被談候

御中間頭
山崎又兵衛
伊倉為八
小野弥兵衛

(朱書)
「式百五拾三」

天保七申年七月 当番所より差越五役承付相廻ス

大和守殿御渡、舎人殿御達

羽織格小給之者父子同高二而父病死之節、倅御譜代場相勤居候ハ、以來跡目不及相願候、病死之届・御切米御扶持方上り書付差出可被申候、但倅御足高御扶持等相増候ハ、追而其段相願候様可被致候

右之趣向々江寄々可被達置候事

(朱書)
「式百五拾四」

天保八酉年正月平四郎殿江差出候処、御附札を以伺之通被申渡候事

御中間頭
御小人頭

右者 大納言様御供并非常御供扣等是迄者 西丸ニ而相心得

手足り不申候節者 御本丸御雇ニ而相勤候得共、御式以後者

御本丸ニ而御供并非常御供扣共相心得、手足不申候節者 西

丸御雇ニ仕候様相心得可申哉奉候候、以上

酉正月

御中間頭
御小人頭

伺之通可被心得候

三月

村瀬平四郎
本多左内
松平助之丞
三枝左兵衛

(朱書)
「式百五拾五」

天保七申年十二月左内殿被遣候ニ付、五役承附いたし当番所江返上

同年四月朔日御用所彦十郎より差越承附相返ス

御目付衆

明楽飛驒守

御中間頭江

是迄諸向江相渡候灯油之儀、綿実^(底)扨庭ニ付上方より御売上^(買カ)相成候間、当月十日より以後暫時之間油実^(綿カ)油調合不致渡方相成候段
漆奉行申立候、此段御心得及御達候

上様 御移徙相濟御供之面々開候ハ、御行列ニ相立候虎波^(皮)抛鞘五拾本蓮池御金藏後御多門江差遣、御弓矢鎗奉行江相渡可申候

申十二月

四月朔日

村瀬平四郎
本多左内

天保八酉年二月九日伊勢守殿被遣五役承附いたし御徒押江相廻ス

同日書面当番所より差越承附返上

御目付衆

明楽飛驒守

村瀬平四郎殿
本多左内殿

御徒頭

諸向渡灯油江暫時之間綿実油調合不致相渡候積り先達而及御達置候、此節より前々之通右綿実油調合いたし相廻候旨漆奉行申聞候、此段及御達候

酉二月

四月朔日

御徒頭

(朱書)
「式百五拾六 式百六拾組合」

同年三月左内殿被遣承附いたし御同人江返上

御中間頭江

内府様 御本丸江御移徙之節、御投鞘五拾筋持人御中間五拾人・手代拾人外ニ組頭式人可差出候事

(朱書)

「式百五拾七 式百五十八番・式百五拾九番并式百六十八番・式百六十九番見合之事」

同年三月

御目付衆

小普請奉行

小野弥兵衛組
御中間
神田忠作

右者小普請方改役荒井精兵衛儀御尋候儀有之候ニ付、評定所江差出候様大草能登守相達候ニ付当月十九日差出候処、一通り尋之上同道人江預ケ遣候段、土屋紀伊守・大草能登守・柳生伊勢守立合紀伊守申渡候段相届候間、小普請方改役江宅番申渡置候処、此節臨時御修復ケ所多ニ付差支候間、親類共江宅番之儀主膳正殿江相伺候処伺之通被仰渡候間、右之段忠作江御申渡有之候様存候、此段及御達候、以上

酉三月

(朱書)
「式百五拾八 式百六十八番・式百五十七・式百五十九・式百六十九
見合之事」

同年三月廿日

山崎又兵衛組
小普請方改役下役出役
岩瀬松太郎

右之者昨十九日小普請方定小屋より出火之節泊合ニ付、昨夕評定所江呼出し大草能登守より達之旨

一、右同人昨十九日於評定所一通り尋之上吟味中同道人江預ケ返し

候ニ付、御書面主膳正殿江進達仕候旨小普請奉行達

但右ニ付此方より者御届不差出候

一、同人預ケ返し之旨小普請方改役下役ニ而宅番差出候処、御人少ニ付宅番之儀此方ニ而差出候様、尤呼出し等之節者小普請方下役差

出候旨小普請奉行より懸合ニ付、此方組も御人少旁ニ付親類共江宅番之儀可申渡事

同年六月十三日達書一通御部屋善丘より達有之候間、承付いたし即刻返上

御目付衆

小普請奉行

山崎又兵衛組
小普請方改役下役出役
岩瀬松太郎

右松太郎儀今十三日申渡候儀有之候間、早々評定所江差出候様土屋紀伊守・大草能登守・柳生伊勢守申達候ニ付、召連之儀者支配向差出申候、此段宅番之者江御達有之候様いたし度候、以上

六月十三日

御目付衆

小普請奉行

山崎又兵衛組
小普請方改役下役出役
岩瀬松太郎

右松太郎儀当三月十九日評定所江差出候処、御吟味一通尋之上同道人江預返し之趣土屋紀伊守・大草能登守・柳生伊勢守申渡候ニ付、御支配之儀ニ有之候間其御方より宅番御申渡有之候様三月廿日御達申置候処、昨十三日於評定所松太郎儀押込被仰候旨土屋紀伊守・大草能登守・柳生伊勢守立合、紀伊守申渡候旨親類縁者共宅番相止候様可仕旨相模守殿江申上候間、此段御達申候、以上

六月十四日

同御長屋御門・御同所御駕籠台

(朱書)
「式百五拾九 式百五拾七番并式百六拾九番・式百五十八・式百六十八見合之事」

同年六月廿四日当番所生駒藤藏差越承付返却

「御目付衆

小普請奉行

小野弥兵衛組

御中間

神田忠作

右小普請方改役荒井精兵衛御尋中親類縁者共宅番之儀主膳正殿江相伺候処、当三月廿一日伺之通被仰渡候間、書面之忠作宅番之義御申渡有之候様御達申置候処、昨十三日於評定所精兵衛差扣被 仰付候ニ付、宅番相止候様可仕旨相模守殿江申上候間此段御達申候、以上

六月廿四日

- 一、内府様御供之儀者 御本丸方より御迎罷越御供仕候事
但御供揃御刻限一時半早ニ 御本丸相揃、其段御供御目付江可申込事
- 一、公方様御供之儀者 西丸より御迎罷越御供仕候事
但御供揃御刻限一時半早ニ 西丸江相揃、其段御供御目付江可申込事
- 一、両 御丸共御供之面々給熨斗目半袴着用之事
- 一、御供建・開場所別紙絵図面之通ニ候事
- 一、御供御行列別帳之通ニ候事
- 右之通伺相濟候事
- 三月
村瀬平四郎
本多左内
松平助之丞
三枝左兵衛

(朱書)
「式百六拾 式百五十六組合」

天保八酉年三月

御移替之節

内府様御道筋

西丸御駕籠台より御玄関前御門・同仲仕切御門・同大手御門・

内桜田御門・百人組中御門・御玄関前御門・御玄関

公方様御道筋

御駕籠台より御玄関前御門・中御門・蓮池御門・西丸御裏御門・

ここに挿入図あり(巻末参照)

内府様 御移替之節

御注進

一、御道具出候由

御小人方

御本丸江

一、御駕籠被為 召候由

御徒方
御小人方
右同断

内府様 御本丸江
御移替之節 御供行列

一、内桜田御門より

御徒方
右同断

附人

御小人方

御徒言人 口附之者 御持筒 同心 五拾挺 同与力 拾人
御馬 沓箱 口附組頭 御持弓 同心 五拾張 同与力 拾人
御徒言人 口附之者 御持筒 同心 五拾張 同与力 拾人

一、西丸下見候由

御先

同

御小人方
御本丸江

御持筒頭

御中間組頭 御拋鞘 式拾五本 御中間

御中間頭 御鎗奉行 御先番 御徒組 一組

一、下乗橋江
御先見候由

右同断

御持弓頭

御拋鞘 式拾五本 御中間

御先番 御徒組

右之通伺相濟候事

三月

村瀬平四郎
本多左内
松平助之丞
三枝左兵衛

御供番 御徒組 一組 御徒頭 御挟箱 同 同 御台傘 御日傘 御曲録 御牀机
御供番 御徒組 御徒頭

公方様 御移替之節 御注進

一、御道具出候由

御小人方

西丸江

御徒目付 御小人目付 同組頭 御奉公 御供

一、御駕籠被為 召候由

同

同断

御小人組頭

小十人式組

小十人頭

御供番

小十人頭

加 御供

同

御本丸江

御同朋

一、西丸江被為 入候由

右之通伺相濟候事

三月

村瀬平四郎
本多左内
松平助之丞
三枝左兵衛

御同朋

御長刀

御

奥向之面々

御側衆

御駕籠之者頭

若年寄衆 御側衆

御草履取 御日傘指

中奥御小性 同御番
 御腰物筒 御徒 御目付 御徒目付 御小人目付
 中奥御小性 同御番
 御腰物筒 御徒 御目付 御徒目付 御小人目付
 中奥御小性 同御番

御直鎗 御小人頭 御鉄炮 同組頭 御具役
 御数寄屋坊主 御鏢鍵 御小人頭 御鉄炮 同組頭 御太鞍役
 御茶弁当 御露次之者 御十文字 同 御蓑箱
 御拋鞆 御手傘 御具挟箱
 御直鎗 御中間頭 同 同組頭 急御雨覆

御小性組与頭 同御番衆 一組 御召御馬 沓箱 御召御馬 沓箱
 御書院番組頭 同御番衆 一組 御馬方 御召御馬 沓箱

御召御馬 御馬乘 御小性組御供押 御日傘
 御馬乘 沓箱 御召替御駕籠 御借馬老疋 御小性組御供押 御雨傘
 御書院番御供押

御徒押 御小人押 御徒目付 御小人目付 御小性組御供押
 御小人押 御徒目付 御小人目付 御書院番御供押

奥向之面々并 御徒押 御小人押
 布衣以上御役人 同勢 此間式拾三間程置 御徒押 御小人押
 御徒押 御小人押 御徒押 御小人押

布衣以下之面々 御小人押
 同勢 御小人押

公方様西丸江 御供行列
 御移替之節

御先払 御小人目付 御小人目付 御徒目付 御長刀 小十人 小十人 小十人組頭
 御小人目付 御小人目付 御徒目付 御長刀 小十人 小十人 小十人組頭

御小性組 同 若年寄衆 御草履取
 御小性組 同 御側衆 御駕籠之者頭
 御小性組 同 御小納戸

御茶弁当 御数寄屋坊主 御日傘
 御露次之者 御徒目付 御徒目付 御小人目付 御小性組御供押
 御数寄屋坊主 御徒目付 御徒目付 御小人目付 御小性組御供押
 御雨傘

御挟箱 御蓑箱 御馬 御馬乘 沓箱
 御挟箱 御雨覆 御馬 御馬乘 沓箱
 御中間頭之内老人 御小人頭

(朱書) 「式百六拾壱」

天保八酉年四月七日当番所速水左太夫差越承付返却
 御徒目付組頭江 御靈屋江 上様 御参詣之節御轅二而
 御代替二付紅葉山惣

御玄関より被為 成、供奉行列等之儀前々正月十七日 公方
様 御参詣之節之通ニ而候事

一、白張着之者者 御成之節 台徳院様 御靈屋惣御門前左右江相

開 台徳院様 御靈屋より 大猷院様 御靈屋江被為 成

候節者右開候所より少々引下候様可致事

大猷院様 御靈屋江被為 入候而御内通 御靈屋江被為 入候

内御橋外江繰出御行列建置候事

一、亀井坊立開之儀者大紋行列立開例御行列之節之通相心得候様可

致事

右之通伺相濟候事

四月

村瀬平四郎
本多左内

(朱書)
「二百六拾貳」

辰四月八日当番所組頭前田又三郎より差越

近々御能之節御供之方江御料理被下候間 大御所様御供支配

向人数取調今日中可差出候事

四月八日

松平助之丞

近々於 御本丸御能之節
大御所様御供之者

御供人数書

御中間頭之内 壹 人
御小人頭
御中間目付
御小人目付 合五人

右之通御座候、以上

四月九日

御中間頭
伊倉為八
御小人頭
藤田五郎助

御長刀役 貳 人
御草履取役 壹 人
御小道具役 拾三人
御使之者 拾八人
触番之者 九 人
御持鍵役 五 人
野方御使 五 人

(朱書)
「貳百六拾三」

天保八酉年四月二日伊勢守殿江申上、同三日御懸合御往答書面当

番所池田為助を以御下ケ承付返上

明三日九時之御供揃ニ而 初之丞殿西丸江被成御出候旨御附

神谷三左衛門申聞候ニ付、右ニ付御供方之儀者 御移替相濟

候ニ付 御本丸より罷出、諸事は迄西丸ニ而相勤候通相心得可

申哉、此段及御問合候否早々御下ケ札ニ而御申聞被成候様致度

候、以上

四月

柳生伊勢守

御書面之趣致承知候 初之丞殿西丸御出被成候ニ付、御

供方之儀是迄西丸ニ而相勤候通 御本丸ニ而相勤候様御

心得可被成候、且御注進之儀も御別紙之通御心得可被成候

四月

大前近江守

四月三日御附人

一、二丸御風呂屋口
御出

一、西丸江
御入

御歸之節
一、西丸右之間
御出

一、二丸江
御入

〔朱書〕
「式百六拾四」

天保八酉年四月 日当番所より差越承付返却

西丸御徒目付組頭江

大御所様両山・紅葉山 御参詣之節御供并 御先番 御城内

外 御成御供・火事・急事之節御供 御先番如都而是迄 上

様西丸ニ被為 在候節之通相心得可申候事

但御貝・太鞍役・御徒押江可相達候

右之通河内守殿江伺相濟

〔朱書〕
「式百六拾五」

天保八酉年四月 日越前守殿御渡、伊勢守殿御達之旨当番所より

差越承付返却

一、御役不替西丸より 御本丸江参り候分証文改ニ不及、只今迄

之証文ニ而濟候事

一、御役不替 御本丸より西丸江参り候分証文ニ而濟候事

一、和泉守・越前守・伯耆守印形之分者和泉守・越前守・備後守印

形ニ成候事

一、備後守印形之分者伯耆守印形ニ成候事

一、河内守・大和守・相模守・肥前守・肥後守・主膳正印形之分者

河内守・大和守・相模守・肥後守・内膳正印形ニ成候事

一、豊後守・内膳正印形之分者肥前守・主膳正印形ニ成候事

右之通候間可被得其意候

〔朱書〕
「式百六拾六」

明後晦日上野 最樹院様 御靈屋江 大御所様 御参詣被

遊候節、御供御行列御道筋并西丸御玄関前御供建場・開之儀、

前々西丸より 御参詣被遊候節之通ニ候事

一、御成掛 御装束所江被為 入 御靈屋惣御門通被為 成、夫よ

り塀重御門通り御装束所江被遊 御立寄候御供建場・開場并

御先勤 御目見場所勤番御固等諸事前々 御本丸より 御参詣

被遊候節之通ニ候事

右之通伺相濟候事

五月廿八日

松平助之丞

〔朱書〕
「式百六拾七」

天保八酉年六月三日差出ス

肥後守殿

御台所江御断

村瀬平四郎

覚

西丸
御中間目付
御小人目付
式人

右者 御本丸勤向為見習去申九月三日より之泊り相勤候ニ付御
台所断申上候処、此節見習相濟候ニ付御断返申上候、御賄頭江
被仰渡可被下候、以上

西六月
御中間頭
御小人頭

(朱書)
「式百六拾八 式百五十七より同八迄」

天保八酉年六月廿四日当番所生駒藤蔵より差越承付返却

御目付衆
小普請奉行

(ミセケチ)
「此廉八逆」
御中間頭
山崎又兵衛組
小普請方改役下役出役
岩瀬松太郎

右松太郎儀当三月十九日評定所江差出候処、御吟味一卜通尋之
上同道人江預返候趣土屋紀伊守・大草能登守・柳生伊勢守申渡
候ニ付、御支配之儀ニ有之候間、其御方より宅番御申渡有之候
様三月廿日御達申置候処、昨十三日於評定所松太郎義押込被
仰付候旨、土屋紀伊守・大草能登守・柳生伊勢守立合紀伊守申
渡候旨、親類縁者とも宅番相止候様可仕旨相模守殿江申上候間
此段御達申候、以上

六月廿四日

(朱書)
「式百六拾九 右同断」

御目付衆
小普請奉行

(ミセケチ)
「此廉八逆」
御中間頭
小野弥兵衛組
神田忠作

右小普請方改役荒井精兵衛御尋中親類縁者共宅番之儀主膳正殿
相伺候処、当三月廿一日伺之通被仰渡候間、書面之忠作宅番之
儀御申渡有之候様御達申置候処、昨十三日於評定所精兵衛差扣
被 仰付候ニ付、宅番相止候様可仕旨相模守殿江申上候間此段
御達申候、以上

六月廿四日

(朱書)
「式百七拾」

天保八酉年八月書面掛りより差越承り附返却

御中間頭
御小人頭江
御駕籠頭

初之丞殿御引移之節、御供相勤候御中間・御小人・御駕籠之者
衣服為受取候積り伺相濟候事

八月
柳生伊勢守

御小人目付
拾式人
御小人押
六人
御中間
拾七人

御小人 三拾三人
御駕籠之者 式拾四人

御駕籠之者先例拾八人之処、此度者御先勤六人相増申候、右者初之丞殿一ツ橋屋形江御引移之節、御供并御注進等相勤申候、以上

八月

御中間頭
御小人頭
御駕籠之者頭

同年八月十日内膳正殿御渡

来ル十一日 初之丞殿一ツ橋江引移ニ付、高家詰衆・御奏者番・布衣以上之御役人当日詰合計、掃部頭・老中於殿中御祝義可被申上候、尤可為平服候、西丸江者此儀不及候

御中間頭
御小人頭
御駕籠頭

一、明十一日 初之丞殿二丸より御登 城之節、御供方染帷子麻

上下着用致候様伺相濟候ニ付、此段申達候事

八月

柳生伊勢守

(朱書)
「式百七拾壹」

天保八酉年十一月御扣共三通例書老通相添月番主馬殿江差出入、同月廿三日大草安房守組与力立合請取候事

御中間大繩屋敷取戻
之義奉願候書付

月番
大沢主馬
柳生伊勢守

覚

拝領屋敷
本郷元町
百坪八合

御徒目付
神谷昇太夫

右昇太夫儀武士地拝領被 仰付町屋敷上ケ地ニ相成申候、右者御中間大繩屋敷ニ御座候間、先格之通御中間組江御返し被下候様奉願候、以上

酉十一月

御中間頭
山崎又兵衛
伊倉為八
小野弥兵衛

例書

覚

御目付支配無役
松岡銀蔵

右銀藏儀拝領町屋敷上り地ニ相成候処、御中間大繩屋敷ニ付天保五年八月取戻之儀申上候処、同年十月願之通元組江御返し被下候旨相模守殿被仰渡候

酉十一月

御中間頭
山崎又兵衛
伊倉為八
小野弥兵衛

同年十一月廿六日

右昇太夫上ケ地元御中間大繩屋敷ニ付、先格之通御中間組江御返し被下置候旨相模守殿被仰渡候段、左兵衛殿被申渡候事

御徒目付
神谷昇太夫

〔朱書〕
「式百七拾式」

天保八酉年十二月取越米願并例書共尅通ツ、月番主馬殿江差出ス

御中間類焼之者取越米之儀

奉願候書付

御切米

一、式拾俵

同 一、拾七俵

御中間

御中間頭

今井八郎右衛門

同断

小磯清九郎

内山英助

鎌方求太郎

松永清兵衛

萩原源助

同 源太郎

今井長五郎

加藤九左衛門

同 長之助

長瀬平五郎

同 平太郎

羽田市藏

同 十次郎

同 正之助

小金井長三郎

萩原才兵衛

平井讚三郎

近藤龜太郎

神田忠作

関口牧太郎

右之者共儀本郷春木町住宅罷在候処、当十一月十七日夜同所より出火ニ而居宅類焼仕候ニ付、来戌春夏御借米只今取越為受取申度奉存候、御勘定所江添状之儀御断可被下候、以上

酉十二月

御中間頭
三名

例書

御目見持格

表火之番

湯浅孫作

右孫作儀天保五年十二月九日夜牛込山伏町居宅致焼失候ニ付、同六年正月春夏御借米取越之儀、曲淵勝次郎殿・羽太庄左衛門殿御月番にて相濟申候

酉十二月

御中間頭

下ケ札

△ 書面同性之者若哉部屋住勤之者ニ候ハ、先格取越米之儀一季ニ有之候間御札可被仰聞候

酉十二月

書替所

此返答下ケ札

本文之内

萩原源太郎

今井長五郎

加藤長之助

長瀬平太郎

羽田十次郎

右者部屋住勤ニ御座候

羽田正之助

萩原才兵衛

右者同性ニ而も別規ニ御座候

酉十二月

御中間頭

本書左之通

覚

御切米

一、貳拾俵

同

一、拾七俵

一、
(一、)

御中間

今井八郎右衛門

同断

小磯清九郎

同断

内山英助

鎌方求太郎

松永清兵衛

萩原源助

同 源太郎

今井長五郎

加藤九左衛門

同 長之助

長瀬平五郎

同 平太郎

羽田市蔵

同 十次郎

同 正之助

小金井長三郎

萩原才兵衛

平井讚三郎

近藤龜太郎

神田忠作

関口牧太郎

右之者共儀本郷春木町住宅罷在候処、当十一月十七日夜同所よ

り出火ニ而居宅類焼仕候ニ付、来戌春夏御借米源太郎・長五郎・

長之助・平太郎・十次郎儀者来戌春御借米只今取越為受取申度

奉存候

右之通御勘定奉行衆より書替所江御添状被遣被下候様奉存候、以上

西十二月

山崎又兵衛 印
伊倉為八 印
小野弥兵衛 印

右之通書替奉行江御断可被下候、以上

西十二月

水野采女 印
大沢主馬 印

内藤隼人正殿

明樂飛驒守殿

矢部駿河守殿

深谷遠江守殿

田口五郎左衛門殿

鳥居八右衛門殿

川路三左衛門殿

中野又兵衛殿

村田幾三郎殿

右本紙程村ニツ折ニ認メ上包美濃紙折掛、御扣美濃紙ニツ折上

包同断

(朱書)

「貳百七拾三」

天保八酉年十二月当番所高倉助五郎差越、五役承附返却

御中間頭

御小人頭江

御駕籠頭

御城内 御成麻上下着用ニ而も上下以上御供之面々以来紅葉山

御参詣之外平服御供無之候共、雨天之節半合羽相用度大和

守殿江相伺候処、伺之通御書取を以御同人被仰渡候事

十二月

水野舍人

(朱書)

「貳百七拾四」

天保九戌年二月廿一日当番所上村九左衛門より達ス

武家諸法度

一、文武忠孝を励し可正礼義事

一、参勤交替之儀毎年可守所定之時節、從者之員數不可及繁多事

一、人馬・兵具等分限ニ応し可相嗜事

一、新規之城郭構營堅禁止之、居城之隄^{コウライ}・石壁等敗壞之時者達奉行所可受差図也、櫓・堀・門以下者如先規可修補事

一、企新規結徒党成誓約并私之関所、新法之津留制禁事

一、江戸并何国ニ而も不慮之儀有之といふとも猥不可懸集、在国之輩者其所を守り下知を可相待也、何処ニ而雖行刑罰役者之外不可出向、可任檢使之左右事

一、喧嘩口論可加謹慎、私之諍論制禁之、若無扨子細有之者達奉行所可受其旨、不依何事令荷坦者本人よりおもかるべし并本主之障り有之もの不可相拘事

附頭有之輩者百性訴論者其支配江令談合可済之、有滞儀者評

定所江差出之可受捌事

一、国主・城主・壹万石以上近習并諸奉行・諸物頭私不可結婚姻、惣而公家与於結縁辺者達奉行所可受差図事

一、音信・贈答・嫁娶之規式、或者饗応、或者家宅宮作等其外万事可用儉約、惣而無益之道具を好ミ不可致私之奢事

一、衣裳之品不可混乱、白綾公卿以上、白小袖諸太夫以上免許之事

附徒若党之衣類者羽二重・絹紬布・木綿、弓鉄炮之者者紬布

其下ニ至リ

一、乘輿者一門之歷々・国主・城主・壹万石以上并国大名之息、城主及侍從以上之嫡子、或者年五十以上許之、医師・僧家者制外之事

一、養子者同性相心之者を撰之、若無之ニおゐてハ由緒を正し存生之内可致言上、五十以上十七歳以下之輩、及末期雖養子吟味之上可立之、縦雖実子筋目違たる儀可立からざる事

附殉死之儀弥令制禁事

一、知行之所務清廉沙汰之国郡不可令衰弊、道路・馭馬・橋・舟等無斷絶可令往還事

一、諸国散在之寺社領從古至今ニ所附來者不可取放之、勿論新地之寺社建立弥令停止之、若無扨子細有之者達奉行所可受差図事

一、万事応江戸之法度、於国々所々可尊行事

天保九戌年二月廿一日

〔朱書〕
「式百七拾五」

同年三月十日〔朱書〕
「内膳正殿御渡、三藏殿御達」御小人目付長田小太郎持參、五役承り附いたし御徒押江廻ス

西丸炎上ニ付 大御所様 御本丸江被為 入候間、御謁事等

御本丸江被為 入候間、御謁事等

御本丸江被為 入候間、御謁事等

右之通可被相触候

三月十日

今日炎上ニ付 三御所様為伺御機嫌明十一日 御本丸江惣

出仕有之候間、四ツ時登 城可有之候

但病氣・幼少之面々者月番之老中伯耆守・備中守江以使者御

機嫌可被相伺候、且在国在邑之面々者飛札可被差越候

右之趣可被相触候

三月十日

同年三月御用所より差越承附返却

黒鍬之者頭

御中間頭 江

御小人頭

西丸御駕籠頭

大御所様 御本丸江被為 入候ニ付、火事・急事之節御供者者
大御台様

御本丸江罷出候様可仕旨主膳正殿江申上候、依之相達候事

三月

一色主水

(朱書)
「式百七拾六」

天保九戌年四月書面下ケ札いたし御部屋勇格江返却

御目付衆

御鳥見組頭

御中間小林八郎次拝領屋敷本所吉岡町百四拾三坪五合御鳥見梶
田磯五郎江、同人拝領屋鋪洪谷筭橋式百式拾坪余之内百坪余八
郎次江屋敷相對替致度旨磯五郎申聞候、右八郎次よりも申出相
違も無之候ハ、御同様願書進達可仕奉存候、尤私共方ニ而者
御支配増山河内守殿江進達仕候間、日限御取極可被仰下候、私
共進達書面追而差上候様可仕候、以上

四月

後藤与兵衛
杉浦又作

下ケ札

書面之趣拙者組御中間小林八郎次よりも願出相違
無之候、来ル廿五日進達書面差出可申候

四月廿三日

御中間頭

小野弥兵衛

同年四月廿五日御扣共三通月番采女殿江差出ス

拝領屋敷相對替
之儀申上候書付

月番

大沢主馬
水野采女

覚

洪谷筭橋

一、式百式拾坪余

御鳥見

梶田磯五郎

内

切坪ニ而百坪余

小林八郎次江

本所吉岡町

一、百四拾三坪五合

右屋敷

梶田磯五郎江

右八郎次屋敷何之頃拝領仕候哉、先年類焼之節書物焼失仕年号

月日相知不申候、是迄相對替等不仕候

右拝領屋敷書面之通相對替仕度旨八郎次奉願候ニ付申上候、願

之通被 仰付被下置候様仕度奉願候、以上

戊四月

御中間頭

小野弥兵衛

御鳥見梶田磯五郎拝領屋敷
切坪相對替奉願候書付

後藤与兵衛
杉浦又作

高百俵五人扶持
外野扶持五人扶持

御鳥見
梶田磯五郎

拝領屋敷
渋谷筭橋坪数貳百貳拾坪余

右著先祖梶田金兵衛 明信院様御附相勤候節、天和三亥年閏五
月拝領仕候処被仰渡候性名相願有之、其後相對替不仕候

右屋敷之内
切坪百坪余

小林八郎次江

高拾八俵壹人半扶持

小野弥兵衛組
御中間
小林八郎次

拝領屋敷
本所吉岡町坪数百四拾三坪五合

梶田磯五郎江

右之通屋敷切坪相對替仕度旨梶田磯五郎奉願候、願之通被 仰
付被下候様仕度奉願候、以上

戊四月

後藤与兵衛
杉浦又作

同年五月廿八日大和守殿被仰渡候段、舍人殿立合耀藏殿被申渡候事

御目付江

小林八郎次拝領屋敷
本所吉岡町
百四拾三坪五合

梶田磯五郎江

梶田磯五郎拝領屋敷
渋谷筭橋
貳百貳拾坪余之内
百拾坪余

御中間
小林八郎次江

(朱書)
「貳百七拾七」

右願之通屋敷相對替被 仰付候、御普請奉行江可被談候

同年閏四月大和守殿御下ケ主馬殿被遣候旨、当番所小野伝左衛門
差越承附返却

二丸新御門番
之儀申上候書付
美濃部筑前守
後藤周防守

天保三辰年二丸御長屋御門出来之節、御門番之儀御同所御長屋
御門番より兼勤相成申候、其後一ツ橋御屋形江 刑部卿様御引

移後御門締切相成御門番引払候処、此度御門内江御製薬所御引
建直し相成候ニ付、御普請出来之節御門番以前之通相勤候様仕
度奉存候、右之段御目付二丸御留守居江被仰渡可被下候、以上

閏四月
美濃部筑前守
後藤周防守

同年閏四月廿五日当番所小幡万兵衛より差越承附いたし返却

二丸新御長屋御門番
之儀申上候書付
美濃部筑前守
後藤周防守

二丸新御長屋御門番之儀先達而申上置候、御同所御製薬所御引
直出来ニ付明廿六日引移候間、当朝より御門番相勤候様仕度奉
存候、以上

閏四月廿五日
美濃部筑前守
後藤周防守

二丸新御長屋御門番人勤方之儀左ニ申上候

一、御門明キ六ツ時より暮六ツ時迄明ケ置、夜五半時迄者自分斷次

第相通、同刻締切、其後者入出共姓名・役名・人数共承礼候上
帳面江記置相通候様可仕候哉

一、御門前 通御之節者御門締切ニ而平伏仕罷在候様可為仕候哉

一、夜ニ入 通御之節者御門外左右ニ御挑灯差出候様可仕哉

一、御側衆・大目付衆・御目付衆御通之節者御番所外江罷出下座仕
為相製候様可仕哉

一、年始・五節句其外御規式之節者麻上下着用可為仕候

一、持場内ニ而若異變御座候節者、早速ニ丸当番所江相届候様可為仕哉

右之通奉伺候、以上

閏四月

御中間頭

伊倉為八

小野弥兵衛

○ 伺之通可申渡候

覚

被仰渡之趣奉畏候、同役一同申合急度相守可申候、以上

二丸新御長屋御門番

萩原利左衛門

川目寿作

五月

(朱書)
「式百七拾八」

天保九戌年六月十九日

銀式枚宛

山崎又兵衛
藤田五郎助

西丸炎上之節早速

西丸江罷出骨折候ニ付被下之

御目付江

右於焼火之間若年寄衆并肥後守殿御出席肥後守殿被仰渡候

御小人目付

御使之者

五拾四人

金式百疋ツ、

西丸火事之節骨折候ニ付被下之

右主馬殿被仰渡候事

(朱書)
「式百七拾九」

同年六月廿三日書面御右筆所より問合ニ付、伝左衛門より差越候
間下ケ札いたし同人江返し、御小人方も同様ニ付是又下ケ札いた
し一所ニ返却

書拔

天保三辰年九月廿三日

公方様飯田町御葉園江

御成

大納言様番町御葉園江飯田町辺初而

御成

同年九月廿七日

公方様 大納言様浅草筋江

御成

同五年四月六日

公方様 大納言様浅草筋江

御成

同年五月三日

公方様 大納言様浜御庭江

御成

但

御台様 有君様ニも御同所江

御入

同六年八月十一日

公方様 大納言様浅草筋江

同七年申年四月廿七日

公方様 大納言様浜御庭江

但

御台様 有君様ニも御同所江

御成

御成

御入

覚

拝領屋敷

本郷追分町

四拾九坪三合余

本所中之郷

御中間新町

八拾九坪七合

元御代官

西村貞太郎手附

洞 金助

右金助儀此度御扶持被 召放町屋敷上り地ニ相成申候、右者御

中間大縄屋敷ニ御座候間、先格之通御中間組江御返し被下候様

奉願候、以上

戊七月

御中間頭

伊倉為八

小野弥兵衛

落合五太夫

下ケ札

御書面之内

公方様

大納言様

御同日

御供之

節者

内府様 御人江

御城内御供之分

詰切為仕、残人数より

大納言様御供為相

勤、不足之分者御門々々番人共令操合為相勤、

其外御同道 御成之節者前広御沙汰御座候得

者、是又御門々々番人共より御雇仕可成丈ケ

御間ニ合来候得共、差掛り非常之節者右御雇

出来兼申候

六月廿三日

御中間頭

下ケ札

本文洞金助儀、拝領町屋敷上り高を以町会所金

借用有之候ニ付、残金返納此方引受皆済為仕候

間、取戻之儀奉願候而も差支之儀無之哉之旨、

町奉行・御勘定奉行・御勘定吟味役江掛合およ

ひ候処、差支之儀無之旨申聞候間、取戻願之通

被 仰付被下候様仕度奉存候

御附札

町奉行江申渡候間可被談候

(朱書)
「式百八拾」

同年七月九日御扣共三通・例書尙通御月番五兵衛殿江差出ス、八

月十四日御附札を以相模守殿被仰渡候段、主水殿立合耀藏殿被申

渡候

御中間大縄屋敷

取戻之儀奉願候書付

月番

徳山五兵衛
鳥居耀藏

例書

御目付支配無役

松岡銀藏

右銀藏儀御扶持被 召放拝領屋敷上り地ニ相成候処、御中間大繩屋敷ニ付天保五年八月取戻之儀申上候処、同年十月願之通元組江御返し被下候旨相模守殿被仰渡候

戊七月

御中間頭

伊倉為八
小野弥兵衛
落合五太夫

町奉行衆
御勘定奉行衆
御勘定吟味役衆

元御代官西村貞太郎手附洞金助御扶持被 召放候ニ付、上り地本郷追分町四拾九坪三合余、右者御中間大繩屋敷之儀ニ付取戻願差出可申奉存候、然ル所右地代引当ニ而金助借受有之候町会所金儀、右殘金返納之儀者此方ニ而引受皆済可致旨申上、取戻之儀可奉願奉存候、尤文化二丑年六月元御中間江守覚太夫上り地之節、会所金返納皆済迄余人江被下候儀御見合有之候積り、元御伺済之趣を以町奉行衆・御勘定奉行衆より御達有之、其節も此方ニ而引受返納之積り申上、願之通組江御返し相成、其後天保五年八月御目付支配無役松岡銀藏御扶持被 召放、町屋敷上り候節も御掛合之上右之振合を以取戻之儀申上、願之通組江御返しニ相成候間、此度も右之通仕度奉存候、御差支之儀も無御座候哉、此段町奉行衆・御勘定奉行衆・御勘定吟味役衆江御掛合被下候様仕度奉存候、以上

戊七月

御中間頭

右之通御中間頭申聞候間及御掛合候、以上

戊七月

徳山五兵衛
鳥居耀藏

御書面元御代官西村貞太郎手附洞金助御扶持被 召放上り地面ニ相成候ニ付、御掛合之趣致承知候、然ル所右金助儀天保六未年中右地代引当ニ而町会所金借受有之候得共、大繩屋敷之儀ニ付金助返納殘金皆済之儀者御中間頭引受返済いたし候旨を以取戻願御進達有之候儀ニも候得者、於町会所差支之筋無之候、此段及御挨拶候

戊七月

筒井紀伊守
大草安房守
明楽飛驒守
田口五郎左衛門
徳山五兵衛殿
鳥居耀藏殿

天保九戌年八月十六日

覚

拝領町屋敷
駒込九軒屋敷

元御代官
西村貞太郎手附
洞 金助

表間口 田舎間三間
裏幅 同 貳間

奥行 同 貳拾間
裏行同拾九間三尺

此坪数 四拾九坪三合余

本所中之郷御中間新町

表間口 田舎間八間四尺五寸

裏幅 表同断

奥行 同 八間三尺
裏行同拾貳間

此坪数 八拾九坪七合

駒込九軒屋敷・本所中之郷新町洞金助上り屋敷右貳ヶ所、御中間大縄屋敷ニ付元組江御返し被下候間、今日各方御出、間数・坪数被成御改、右絵図面之通無相違受取申候、為後日仍而如件

小野弥兵衛組
御中間組頭

戊八月十六日

請取人 中山藤右衛門
同

立合 深谷与十郎

安藤孝三郎殿

都筑金之助殿

町年寄衆中

樽屋三右衛門殿

右場所江立合之者

筒井紀伊守組与力

安藤孝三郎

同組年寄同心

安原善藏

大草安房守組与力

都筑金之助

同組年寄同心

大村大助

地割役

樽屋三右衛門

町年寄手代

堀内忠藏

阿部潤平

地割手代

田端鉄三郎

追分九軒屋敷

町内世話役

高田忠大夫

地面隣家

明キ組御中間

小林金三郎

名主

八左衛門

組合持

茂助

藤之丞

中之郷御中間新町

名主庄太郎煩二付

代

半兵衛

家守 長五郎

組合 善兵衛

右之通立合地面請取相済申候、以上

戊八月十六日

中山藤右衛門

深谷与十郎

(朱書)
「式百八拾壹」

同年九月朔日以來諸願書向左之通相認メ差出候様舍人殿御渡、伝左衛門差越五役承附返却

但見出長ク候節者二行ニも可認事
何之役江書出候書付

頭連名

何之役江書出候覺
一、高何程何人扶持

何役
何之誰
何何歳

内 何程御足高
何程御足扶持

右誰儀、何年何月幾日小普請より歟、何役より歟、何役被 仰
付当何年まで御奉公何年相勤申候、養父何之誰、何役相勤隠居
仕候歟、病死仕候歟、実父何ノ誰
右同断

右之者何役何之誰明跡江被 仰付被下置候様奉願候、以上
何何月 頭連名

但兩人以上書出候節者末之文言左之通

右之者何役 何之誰歟、何之誰か
何之誰明跡江歟

末同文言

右之通頭名前有之書面老通、同文言ニ而頭名前不認書面式通、
都合三通可差出事
但紙品者是迄之通

(朱書)
「式百八拾式」

天保九戌年十月廿五日主馬殿御達、書面繕附返上

御中間頭 江
御小人頭

御中間・御小人 右大將様御人分無之候ニ付、過人之儀大和守
殿・撰津守殿江相願候処、別紙之通被仰渡候間人物相撰早々取調

差出可申候事

十月

大沢主馬

大和守殿御書取

覺

御中間式拾人・御小人三拾人過人被 仰付 右大將様御人ニ
者不相成候、組頭役之儀者難被及御沙汰候、其場所限り
右大將様御用向重々為相勤候儀者可為勝手次第事

(朱書)
「式百八拾三」

天保九戌年閏四月十三日御部屋孝益を以差出候処、後刻御附札を

以相模守殿被仰渡候段、耀藏殿立合采女殿被申渡候

御中間番遠慮被 仰付候者
此上之儀奉伺候書付

覺

小野弥兵衛組

御中間

永田友之助

右友之助実方兄勇太郎儀御吟味之儀有之、去西五月廿六日揚屋
江被遣候ニ付身分之儀奉伺候候、書面之通被 仰付罷在候処、
一昨十一日勇太郎儀御扶持被 召放候旨、於筒井伊賀守御役宅
太田撰津守殿被仰渡候段伊賀守申渡候、奉恐入候旨申聞候、依
之友之助此上之儀奉伺候、以上

戊閏四月

御中間頭
小野弥兵衛

御附札
番遠慮可被申渡候

(朱書)
「式百八拾四」

天保十亥年正月廿八日采女殿江書面差出候処、兩人共心得方宜町内行届候由、尤頭々申付方行届候段御同人被申聞候二付、右兩人江頭より申渡候様是又被申聞候事

伊倉為八組
御中間
木村文次郎
小野弥兵衛組
同断
熊沢新八郎

右者本郷菊坂田町御中間大繩屋敷之儀二付、地主共銘々貸店舗理家守附置町家守為相勤候、右二付地主共之内私共見廻り町内取締方取扱候様右兩人江申渡、町頭与為相唱万事為取扱申候、然ル所町役人共從來等閑之取計仕候処、惣地主共多人数ニ而申合候義行届兼、年来夫形ニ打過罷在候処、右兩人之者繁多之御奉公乍相勤家守共江篤与申論、不益之入用不相懸様精々申付、既に地主出銀等之義乍少分年々相減一同安心仕候趣ニ有之、尤外町内ニ而者左迄ニ行届不申場所も有之候由、畢竟町内長立候者実意ニ世話仕候得者年来之仕癖も建直り可申処、兎角其儘ニ差置候故町々不穩儀も差起り候儀ニ御座候、然ル所右兩人義常々行状も宜、長立候廉を实意ニ相心得世話仕候故町内取締方行届、地主仲ヶ間氣受宜御座候間、先達而私共より薄々沙汰も仕置候得共、猶已後之勵ニも相成候間此段御聽ニ入置候、以上

正月

(朱書)
「式百八拾五」

天保十亥年二月書面五役承附いたし当番所江返却
一、御城内御番所并部屋々々火所有之候向弁当等ニ而湯茶わかし候節炭火相用、焚火相用候義者無之事ニ候得共、万一心違ニ而焚火等相用ひ候義も有之候ハ、以来急度相止候様可被申渡候、以来支配向昼夜 御城内見廻り候間、右之者共より右様之儀見受申立候得者、其節急度相札可申候間此段為心得申達置候、火所有之候御番所部々江可被申渡置候事

二月

御目付

(朱書)
「式百八拾六」

天保十亥年四月二日

伊倉為八組
御中間目付
与十郎倅
岡本代々作
同人組
御中間
岡本次男
岡本金三郎

右父与十郎儀御目付支配無役押込被 仰付候二付、右兩人共身分之義伺書式通御部屋清真を以差出候処、左之通被仰渡候事

御附札
代々作義者 御目見遠慮之格可申渡
候金三郎義者不及押込候

(朱書)
「式百八拾七」

天保十亥年八月十一日

奉願候覺

一、私儀久々痔疾相煩種々養生仕候得共次第二相募難義仕候ニ付、湯治仕候得者宜可有御座与奉存候、依之信州上之諏訪江湯治仕度奉存候、何卒御憐愍を以三廻り之御暇被下置候様奉願候、尤小者老召連罷越候間、右願之通被 仰付被下置候様奉願候、以上

柏原藤三郎 印

一、御組柏原藤三郎奉願候通被 仰付被下置候様親類同様以加判奉願候

甥之統

柏原藤九郎 印

一、組合柏原藤三郎前書奉願候通病牀得与相糺候処、相違無御座候間以加判奉願候、以上

組合

天保十亥年八月

中山藤右衛門 印

小野弥兵衛殿

覺

私儀此度信州上之諏訪江湯治三廻り之御暇奉願罷越候ニ付、往來・彼地逗留中諸事相慎、喧嘩口論勿論權威之間敷儀毛頭仕間敷旨被仰渡奉畏候、急度相守可申候、出立日限來ル十二日江戸表出立仕、往來・彼地逗留共日数三十日ニ而江戸表江九月十九日急度帰府可仕候、以上

亥八月十一日

柏原藤三郎 印

小野弥兵衛殿

覺

一、私儀信州上之諏訪江為湯治今朝六ツ時板橋通出立仕候、此段御届申上候、以上

亥八月十二日

小野弥兵衛殿

柏原藤三郎

同月六日月番伊勢守殿江差出候処、翌七日願之通被仰渡候

覺

小野弥兵衛組

御中間組頭

柏原藤三郎

右者病氣ニ付信州上之諏訪江湯治仕度旨相願申候、依之申上候、以上

御中間頭

小野弥兵衛

亥八月

例書

神谷兵太夫組

御中間

松永清四郎

右清四郎儀文政三辰年二月廿九日信州上之諏訪江湯治仕、同四月六日帰府仕候

御中間頭

小野弥兵衛

亥八月

上包美濃紙折掛

横川御関所
御番人中
御中間頭
小野弥兵衛

拙者組柏原藤三郎小者老人召連信州上之諏訪江為湯治罷越候ニ付、御関所無相違御通可被成候、為其如此御座候

天保十亥年八月

御中間頭
小野弥兵衛

横川御関所
御番中

右用紙者程村豎紙ニ認メ上包美濃紙、八月八日組頭文左衛門を以相渡ス

同年八月十二日御部屋宗甫を以差出ス

覚

小野弥兵衛組
御中間
柏原藤三郎

右病氣ニ付信州上之諏訪江為湯治今朝六ツ時板橋通出立仕候旨相届ケ申候、依之申上候、以上

亥八月

御中間頭
小野弥兵衛

(朱書)
「式百八拾八 式百九拾四番与可見合之事」

同年十一月書面掛御徒目付浅沼三郎兵衛より差越、承附返却

御中間頭江

御台所湯方釜壇御修復ニ付、御台所口外江右仮物取建候ニ付昼夜共見廻り、別而夜中者繁々心附候様新土戸御門番江可被申渡候事
十一月
大沢主馬

同年十二月御扣共三通大沢主馬殿江差出ス

御中間御手当之儀
奉願候書付

大沢主馬

御中間
新土戸番
八人

右者御台所湯方釜壇御修復ニ付、御台所口外江右仮物取建有之候ニ付新土戸番昼夜見廻り、別而夜分者繁々心附候様被仰渡候処、右番人定式式人勤ニ而者手足り不申候間老人増泊り申渡、不寐勤罷在候ニ付乍少分雜費相掛り少給之者難渋仕候間、可相成儀ニ御座候ハ、相応之御手当被下置候様仕度奉願候、尤当七月中御勘定所御修復中御小人御納戸口番昼夜見廻り被 仰付候節奉願候処、御手当扶持被下置候、右例書相添此段奉願候、以上

亥十二月

御中間頭
三名

例書

覚

御小人
御納戸口番

右増泊相勤候者老人江老人半扶持宛之積り、一日老人七合五勺ツ、勤日数を以御修復中御手当扶持被下候事、右之通当八月八日肥後守殿御書取を以被仰渡候、以上

亥十二月

御中間頭

御法事中出役

(朱書)
「貳百八拾九」

天保十一子年正月晝面高倉助五郎より差越、承附いたし同人江返却

黒鍬之者頭

御掃除之者頭江

御中間頭

御小人頭

浄観院様 御葬送之節御先勤・御供之面々并勤番軽キ者迄御賄

被下、且御法事中相詰候向々江も朝夕夜共御賄被下候間、人数

書取調早々可申聞候事

正月

大沢主馬
柳生伊勢守

同年二月五日当番所小幡万兵衛江差出ス

二月六日

浄観院様 御出棺ニ付御供・御先勤人数書

御中間目付

御小人目付合

七拾人

御中間押合

御小人押

拾三人

御玄関番

三人

御中間

但御注進

貳拾五人

御中間合

御小人

七拾五人

(朱書)
「貳百九拾」

右之通御座候、以上

子二月

御中間頭
御小人頭

御中間目付合
御小人目付合

三拾人ツ、

三拾五人ツ、

同年三月十二日御扣共三通西丸御当番一郎左衛門殿江御部屋惠春
を以差出ス、同断之旨御本丸御当番主水殿江壹通御部屋一雲を以
差出ス

以書付御届申上候

(朱書)

本郷壹町目浅利店「まさ屋」善兵衛与申者江私家作売居相頼置候
所、去月晦日右善兵衛代之者水道橋内天野又左衛門与申者同道ニ
而相談いたし度旨申参り候処、私当番留守之趣愚妻相咄し候処、
翌日尚又又左衛門壹人にて参り愚妻江面談いたし、其後外江立出
不立戻候内余程時刻も相過私明ケ番ニ而立歸り候処、椽先ニ腰掛
罷居候者有之候間何人成哉之旨相尋候処、湯島切通西之宮五兵
衛手代之由申、只今夫江参り候人者何方江参り候哉之旨申聞候間、
善兵衛方迄も参り候哉之旨相答候処、右手代之者申聞候者夫二小
箱無之哉与申聞候間、かたはらを見候得者小箱壹ツ有之候間差遣
候処、右手代改見、此箱之内二者鼈甲笄式本、外ニ卷絵櫛・象牙

はちニ而凡金拾両計り之品入置候処無御座候由申聞候、左候得者右又左衛門ハ全クかたりニ御座候由、西之宮五兵衛手代申聞候、左候得者西之宮江者鼈甲買請之咄し、私方江者家作壳居相談与存候間、依之此段御届申上候、以上

子三月八日

大浜奥右衛門

小野弥兵衛殿

小野弥兵衛組

西丸御中間目付

宿所本郷春木町壺丁目

大浜奥右衛門

右奥右衛門儀勝手ニ付家作壳居ニ致し度段、本郷壺丁目浅利店真木屋善兵衛与申者ニ兼而壳居之義頼置候旨、然ル所去月晦日右善兵衛代之者天野又左衛門与申者之由同道ニ而奥右衛門宅江罷越、家作相談いたし度段申聞候処、当番留守ニ付猶又翌朔日右又左衛門与申者罷越、家内之ものへ面談致し、其後外江罷出立帰り不申、余程時刻も相過候内奥右衛門明番ニ而罷帰り候処、町人躰之者椽先ニ腰掛罷在候間何人ニ候哉与相尋候得者、湯島切通町西之宮五兵衛手代之由申聞候、私同道ニ而被参候人者何方へ参り候哉之旨申聞候間様子承り候処、鼈甲筭其外品々入候小箱壺ツ右之人江相渡候由申聞候ニ付家内等見廻り候処、片角ニ小箱有之候間直ニ手代江相渡候得者改見候而、右品々相見不申候よし申聞候、左候得者全又左衛門与申者ニかたり取れ候ニ相違無之旨西之宮手代之もの申聞候由、尤又左衛門与申者見知り候者ニも無之、手代之者も何時何方より召連罷越候哉、家内之もの一向存不申候段右奥右衛門相届申候、依之申上候、以上

子三月

御中間頭
小野弥兵衛

(朱書)
「式百九拾壺」

天保十一子年五月六日書面当番所小幡万兵衛江差出ス

覚

御中間方持場御番所向并部屋々々火所左之通

御長屋御門御番所

一、石炉

壺ヶ所

一、箱火鉢

壺ツ

一、灯

壺ヶ所

新土戸御門御番所

一、石炉

壺ヶ所

一、箱火鉢

壺ツ

一、灯

壺ヶ所

大奥仕切御門御番所

一、石炉

壺ヶ所

一、箱火鉢

壺ツ

一、灯

壺ヶ所

大奥御広敷御長屋御門御番所

一、石炉

壺ヶ所

一、箱火鉢

壺ツ

一、灯

壺ヶ所

大輿裏締戸御番所

一、石炉

壺ヶ所

一、灯

壺ヶ所

一、箱火鉢

右之通御座候、尤御番所向并部屋々々等夜中申合老人宛不寐仕、火之元念入可申旨申渡置候、以上

一、灯

壺ヶ所

子五月

御中間頭

御太鞍槽下土戸御門御番所

一、石炉

壺ヶ所

(朱書)
「式百九拾式」

一、箱火鉢

壺ツ

同年五月九日書面采女殿御渡

一、灯

壺ヶ所

黒鍬之者頭
御中間頭 江
御小人頭

御小人頭

江

一、石炉

壺ヶ所

暉姫君様御葬送之節御先勤・御供之面々御賄被下候間、人数書取調之上今日中可申聞候事

一、灯

壺ヶ所

五月九日

池田修理
水野采女

同所新御長屋御門御番所

一、石炉

壺ヶ所

暉姫君様御葬送之節御供・御先勤人数書左之通

一、箱火鉢

壺ツ

御中間目付合
御小人目付合

七拾人

一、灯

壺ヶ所

御中間押合
御小人押合

拾三人

一、石炉

壺ヶ所

御玄関番

三人

一、箱火鉢

壺ツ

御中間

式拾五人

一、灯

壺ヶ所

御小人

七拾五人

同所御広敷裏締戸御番所

一、石炉

壺ヶ所

右之通御座候、以上

一、箱火鉢

壺ツ

五月九日

御中間頭
御小人頭

(朱書)
「式百九拾三」

同年十月十六日

覚

今十六日遠山左衛門尉御役宅江御呼出シニ付罷出候処、文政三
辰年十月谷中片町武家地守久藏与申者江私妹式才之時養女ニ差
遣候処、其後同人より甚助与申者江又候差遣酌取芸者奉公ニ差
出、其上御法度之勤致候様同人度々申聞候ニ付、無奈儀私方江
先月十九日夜罷越候ニ付早速同人方江為相知申候、然ル処翌廿
日同人妻取戻ニ罷越種々悪口申募、余り不当之儀ニ付段々及掛
合候処、不取用つるを取戻度段出訴仕候間、右訴状掛り与力浅
野十兵衛為読聞候上ニ而、来ル廿二日右答書可差出旨申渡候、
依之此段御届申上候、以上

十月十六日

組合

風間新十郎 印
川村安之進 印

畔柳丈之進殿

子十月十七日御部屋善久を以差出す

覚

畔柳丈之進組

御中間

風間新十郎

右新十郎儀昨十六日遠山左衛門尉御役宅江差出候処、谷中片町
久藏与申者江同人妹養女ニ差遣、其後同人より甚助与申者江又
候差遣候一件に付相尋、猶又来ル十月廿二日答書差出候様申渡
候ニ付組役之者相届候、依之此段申上候、以上

子十月十七日

御中間頭
畔柳丈之進

御尋ニ付以書付奉申上候

一、私妹元つる去ル文政三辰年十月中同人式歳之時、本郷春木町三
丁目ニ而八十次与申者世話ニ而、谷中片町続武家地面守仕居候久
藏与申者相応之暮方仕居候ニ付、私父松之助よりつるを養女ニ差
遣候処、追々追々不仕合ニ相成私方江罷越金子借用致度旨申聞候
ニ付、才覚仕候得共出来兼相断申候処、其後承り候得者久藏儀
判人甚助与申者を相頼、右兩人ニ而新吉原町川村熊吉方江年季六
ヶ年半ニ而、つる十四才之御金五両壹分ニ相定芸者奉公ニ差出し、
其後つる十八歳之節久藏生国江出立仕度旨ニ而つる奉公先江参り
路銀致才覚具候様申聞、其節もつる金三分差遣、其砌より私方
江参り不申、且又久藏妻とり儀者常々眼病相煩女之身ニ而渡世者
難相成、妹方江引取つる悲意之者を相頼、養母之事故大切ニ養育
致候得共とり儀大病ニ相成、去々戊年二月廿一日病死仕、寺者橋
場町長昌寺江相送野辺之回向迄つる自力ニ而取計候ニ付、私母茂
つる方江相尋候処、新吉原町焼失之砌浅草一之権現地面江熊吉義
引越罷在候、其節つる身之上ニ少々間違有之候哉、熊吉方にて年
季相増可申旨つる江申聞候由、右ニ付判人甚助方江去々戊年九月
五日夜罷越甚助江つる相談仕候処、甚助夫婦つる江申聞候者養父
久藏より養女証文差添貴請候、然ル上者実親より彼是六ヶ敷申
筋毛頭無之候趣申渡、同人儀も無是非儀与存見苦敷勤方も不厭、
去亥年三月中堀江六軒町新道家主利兵衛店ニ而同年同月三日より

酌人渡世仕、毎月金高二積り候得者金拾両程ツ、も相働、判人甚助夫婦も悦可申与存候処、欲心増長仕候哉、御法度之勤方致候様申聞候ニ付違背仕候処、甚助夫婦恨ミ存候哉つるを度々打擲致無躰奉公申含、御法度之始末つる儀歎ケ敷先月十九日夜私方江逃参り候ニ付即刻甚助方江為相知候処、同人答ニ者明日可参旨申越、翌廿日同人妻いよ与申者罷越種々悪口いたし、其後甚助罷越私共より以後不通証文差出候様申聞候ニ付つる心躰承り合候処、判人甚助方江立帰り候儀者御免被下候段相歎候間其段懸合候処、達而不相講証文差出候ハ、縄付候而も召連帰り可申杯申募り、余り不当之申方依之つるを引留置申候処、此度甚助より出訴仕候段何共奉忍入候、何卒右甚助江 御利解之上実親元江つるを相戻呉候様被 仰付被下置候様偏ニ奉願上候

子十月

風間新十郎

畔柳丈之進殿

(朱書)
「式百九十四 式百八十八番為見合之事」

天保十一年九月

御台所湯吞釜擅御修復中見廻り相勤候
新土戸御門番御褒美之儀奉願候書付

大沢主馬

御中間

新土戸御門番

三人

右者御台所湯方釜擅御修復中右仮物御台所口外江出来仕候ニ付、昼夜見廻り忝人ツ、増泊り仕候様伺之上、去亥年十一月廿三日

より子年三月廿一日迄夜中見廻り骨折相勤候ニ付、可相成儀ニ御座候ハ、相応之御褒美被下置候様仕度、別紙例書相添奉願候、以上

子九月

(朱書)
「例書留略之」

同年十一月廿日

御目付江

金三百疋宛

新土戸御門番
御中間

三人

右者御台所釜擅御修復中、見廻り火之元其外取締方格別骨折候ニ付被下之
右肥後守殿御書付を以被仰渡候旨主馬殿被申渡候事

(朱書)
「式百九拾五」

天保十二年「閏正」月書面鰭附返上

木村儀兵衛組
御中間
鈴木隣十郎
同人組
同断
鈴木鋸三郎

右之者共叔父御広敷伊賀者関口平七郎儀、昨十一日遠山左衛門尉御役宅おゐて遠島被申渡候ニ付、此上之儀奉伺候処

御附札

番遠慮可被申渡候

右玄蕃頭殿被仰渡候段、伊勢守殿立合主計頭殿被申渡候事
同年二月二日書面鱒附返上

御目付江

御中間

鈴木隣十郎
鈴木鋸三郎

番遠慮申付候得共

此御時節ニ付可被差免候

右豊後守殿被仰渡候段、采女殿立合主水殿被申渡候事

(朱書)
「式百九拾六」

天保十二丑年閏正月廿九日当番所生駒藤藏相達、五役承附御徒押

江相廻ス

大御所様御勝不被遊候ニ付為伺御機嫌明晦日 西丸江惣出

仕、夫より 御本丸惣出仕之事

閏正月廿九日

同年閏正月晦日玄蕃頭殿御渡、真之丞殿御達式々糸野辺弥五郎相
達ス、五役承附致し返却

大御所様御不例御養生不被為叶今辰下刻被遊 薨御候、此段今
日出仕無之面々江可被達候

閏正月晦日

大御所様薨御ニ付今日より 公方様 右大将様 大御台様定

式之御忌服被為請候事

閏正月晦日

大御所様 薨御ニ付今日より普請・鳴物停止候間、得其意可相
触候

閏正月晦日

大御所様薨御ニ付

一、松平加賀守・溜詰御譜代大名・高家・雁之間詰・御奏者番・菊
之間縁頼詰・諸番頭・諸役人・御番衆不残右 御三七日過月
代刺可申候

一、国持大名并庶流・外様大名・交替寄合・表高家寄合・小普請之
面々右 御二七日過月代刺可申候

一、御目見以下之者共坊主・同心以下輕キ者迄右 御一七日過月代
刺可申候

但陪臣者月代刺候儀構無之候

一、西丸附之面々以上者五十日過 御目見以下者三十日過月代刺可
申候

但御一七日過西丸附之御直參之面々髭剃、陪臣者月代刺可申候
右之通可被相触候

閏正月晦日

同日御同人江渡

二月朔日 二日

右両日共 公方様 右大将様 為伺御機嫌出仕之事

三日

公方様為伺御機嫌万石以上之面々可有登 城候
右之通可被相触候

閏正月晦日

西丸向只今迄諸願・諸伺等下総守・河内守・西丸若年寄江差出
し候処、向後月番之老中・若年寄江差出候様向々江可被相達候

閏正月晦日

西丸諸役人・御番衆其外輕キもの迄勤方之儀、先只今迄之通相
心得候様可相達候

閏正月晦日

右五通野辺弥五郎相達ス、五役承附御徒押江廻ス

同日掛り御徒目付井狩紀兵衛より差越承附返却

黒鉄之者頭

御掃除之者頭

御中間頭 江

御小人頭

御駕籠頭

大御所様 御出棺迄非常之節御退場之儀、御庭口より山里通り

吹上江被為 入候事

閏正月

水野舍人
鳥居耀蔵
佐々木三蔵

同日西丸御使之者持参承附返却

御中間頭 江
御小人頭 江

大御所様 御出棺之内急事之節御供方 御在世之時分 御城
内 御成之節、御供立之通相心得 御玄関江相揃、夫より山里
椀木御門江相廻り候事

一、吹上 御先勤之儀も 御玄関前江相揃、夫より吹上御門江相廻
り、御左右次第御固メ場所江相廻候事

右之通可相心得候事

閏正月晦日

二月

四日

五日

六日

七日

八日

万石以下
溜詰

御譜代大名

外様万石以上

溜詰

諸番頭・諸物頭
諸役人・寄合

国持并庶流
四品以上

右之通 公方様 為伺御機嫌登 城候様可被相触候
右大将様

閏正月晦日

同年二月書面肥後守殿御渡、隼之助御達御徒押より差越五役承附
火番組頭江相廻ス

此度東叡山

御靈屋御造立ニ不及

大猷院様

嚴有院様

浚明院様

御靈屋 御相殿

御靈牌 御安置候様被 仰出候

御宝塔之儀者 御代々之御格之通御造立可有之候

右之通被 仰出候間無急度寄々可被達候

一、御出棺之日

公方様 右大将様西丸江被為 成候節、御供之面々者熨斗目半袴着用可仕候事

一、右御当日 御本丸表向者平服 御目通江罷出候面々者熨斗目

半袴、西丸表向之面々者不殘熨斗目半袴着用之事

右之通可被相触候

二月

一、御出棺御供之面々布衣以上者熨斗目長袴、布衣以下者熨斗目半

袴可着候事

但熨斗目者無地ニ而も腰明ニ而も、且又上下小紋ニ而も無地

ニ而も可為勝手次第候

一、御出棺之節御道筋江挑灯・水桶出可申候

但挑灯者紋付有無之無構常之を用可申事

一、御道筋之屋敷前江家主罷出ニ不及事

一、窓蓋可仕事

右之趣向々江も可被達候

二月

二月

九日

高家・雁之間詰同嫡子
御奏者番同嫡子
菊之間縁頼詰同嫡子

十日

溜詰
御譜代大名

十一日

諸番頭・諸物頭
諸役人・寄合

右之通 公方様 右大将様為伺御機嫌登 城候様可被相触候

二月

丑年二月七日

是迄御断物三通物ニ而上ケ来り候処、以来肥後守殿小札付忝通都合二通一緒差出候而可然旨、太田鍵十郎・長野八十之丞申聞候段四郎殿被仰聞候

二月六日

右上ケ方其都度々々 御本丸江御廻り御上ケ事

同年二月十日

西丸向御断物返数之儀者先日達し有之、猶又右之外者 御本丸月番若年寄衆江御扣忝通入候旨、是迄之通心得候様大久保熊次

郎より相達申候

同年二月十一日書付池田為助相達ス

黒鉄之者頭
御掃除之者頭

御中間頭 江

御小人頭

御駕籠頭

御出棺之節御先江相詰候面々并勤番軽キもの・又者迄御湯漬御
賦被下候、御法事中相詰候面々朝夕御夜食共御賄被下候間、人
数書巨細ニ取調早々可申聞候事

二月十一日

水野舍人
鳥居耀藏
佐々木三藏

同年二月十一日掛り太郎作取調差出候様相達ス

黒鉄之者頭

御中間頭 江

御小人頭

西丸御駕籠頭

御出棺之節御供并御注進附人其外持人等先年之振合取調、受取
もの・御断物等可差出事

二月

水野舍人
鳥居耀藏
佐々木三藏

同年二月十二日肥後守殿御渡、求馬殿御達小川伊兵衛より差越承
付御徒押江相廻ス

二月廿日

午下刻

御出棺

戌上刻

御葬送

右之通得其意向々江可被達候

二月

十三日

外様方石以上

十四日

溜詰国持庶流
四品以上

十五日

惣出仕

右之通

公方様

右大将様為何御機嫌登 城候様可被相触候

二月

御出棺有之候而も御沙汰有之候迄只今迄之通相心得勤候様彈正
少弼殿被仰渡候、此段可被達候

二月十二日

大沢主馬
池田修理

御徒目付組頭江

御出棺之節御供之面々御刻限より一時半早メ 西丸 御殿江

可被相揃候、先例矢来御門外相揃来候分者同所江可被相揃候、

此段申達候事

二月

水野舍人
鳥居耀藏
佐々木三藏

同年二月肥後守殿御渡、真之丞殿御達五役承附返上

二月四日

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠頭

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭

二月

十六日

溜詰
御譜代大名并寄合

高家・雁之間詰嫡子

十七日

御奏者番同嫡子
菊之間詰縁頼詰同嫡子
諸番頭・諸物頭・諸役人

十八日

溜詰

惣出仕

廿四日

国持并庶流
四品以上

右之通

公方様

右大將様為何御機嫌登 城候様可被相触候

二月

水野 舍人
鳥居 耀藏
佐々木 三藏

黒鋏之者頭
御掃除之者頭
御中間頭
御小人頭
御駕籠頭

普請者来ル廿一日より 御免之旨被 仰出候事

右之通可被相触候

御出棺之節御先江相詰候面々・勤番軽キ又者迄御湯漬・御賦被
下候、御法事中相詰候面々朝夕御賄被下候、昼夜相詰候分江者
朝夕夜共御賄被下候間、人数書早々取調可被差出候事

二月十一日

渡辺小膳

御出棺之節御注進附人

御注進

御小人方

矢来御門

一、御出棺被遊候由

附人

御小人方

一、一ツ橋御門迄
御先見候由

御先江

同断

御本丸
御先江

一、筋違橋御門
御先見候由

井上筑後守屋敷前迄同断

御小人方

御先江

一、御先見候由

同断

御本丸
西丸江

一、上野黒門迄
御先見候由

同断

御本丸
西丸江

一、山里椀木御門
御出棺被遊候由

一、吹上御門
御出棺被遊候由

同断
同断

一、矢来御門
御出棺被遊候由

同断
同断

一、上野龕前堂江
御入棺被遊候由

同断
同断

一、上野龕前堂
御出棺被遊候由

同断
同断

右之通御注進附人可申込事

二月

水野舍人
鳥居耀藏
佐々木三藏

同月十九日掛りより差越兩役承附いたし直ニ返脚

御中間頭
御小人頭

御出棺 御送葬御供建場・開場絵図并御行列書申達候、披見之

上今日中返却可致事

二月十九日

水野舍人
鳥居耀藏
佐々木三藏

御道筋

矢来御門より竹橋御門右江、御堀端左江、本庄伊勢守屋敷前脇

右江、稲葉丹後守前通り左江、松平信濃守脇前、戸田日向守屋

敷前、筋違橋御門外、神田仲町、旅籠町通り、堀丹波守屋敷前、

新黒門町左江、広小路、上野黒門

御内道筋

黒門より文殊楼前左江、凌雲院前通、松原大師堂、矢来御門通、

龕前堂

二月

同月御書付生駒藤藏より差越、五役承附致御徒押江相廻ス

今度東叡山江相詰候面々高家等迄作法宜敷仕候様可申付候

火之元別而入念可申付候

但家来共猥ニ不致他行様ニ主人江可申付候

一、宿坊江為見廻他人者不及申、たとひ親類たりとも昼夜共ニ罷越

候儀者有之間敷候、近キ親類若無抛子細有之罷越候共、馳走ケ

間敷儀一切致間敷事

但療治受候医師呼寄候儀者可為勝手次第候

一、御用之儀有之出会候者中堂之内相渡候部屋ニ而可申渡候、尤末々

軽キ者共之儀も此段頭支配より可申渡候

但中堂部屋無之輩者御用有之節、御目付江相届候上宿坊にて

可申談候

右之通可被相触候

二月

同年三月十三日

大御所様御法号

文恭院様与可奉称候事

右御達小広間ニおゐて五役相揃、伊勢守殿御書付を以其段向々

江相達ス

同年三月彈正小弼殿御渡、真之丞殿御達御徒押より差越五役承附火之番相廻ス

一、鳴物之儀所作ニ仕候者計来ル廿一日より可被差免候

三月

同年三月廿九日掛り川侯喜三郎より達承附返却

黒鉄之者頭
御中間頭
御小人頭

来月十日 文恭院様 御廟所江 広大院様 御参詣之節

御先・御供勤之面々素服被下候間、人数書認メ明日中差出可

申候事

三月廿九日

鳥居耀蔵
佐々木三蔵

(朱書)
「式百九拾七」

天保十二丑年三月御参詣掛川侯喜三郎江差出ス

一、来月十日上野 文恭院様 御廟所江 広大院様 御参詣之

節人数書

御供組頭
壹 人

御中間目付合
御小人目付
三拾九人

御中間押合
御小人押
拾三人

右之通

三月

同年四月御書付御用所御使持参承附いたし返上

御中間頭

来ル十日五ツ時御供揃ニ而上野 文恭院様 御廟所江 広

大院様被遊 御参詣候ニ付、正六ツ時凌雲院表門玄関江御広敷

御門番より三人可差出候事

四月

鳥居耀蔵
佐々木三蔵

(朱書)
「式百九拾八」

同年三月八日御達書掛御徒目付より達、五役承附返脚

御中間頭
御小人頭
御駕籠頭

別紙之通申渡候事

三月八日

小出丹宮
永井真之丞

来ル十日 右大将様 御参詣行例無御座候得共、御轅ニ而候

間白丁着其外御轅之時之通可被致候

一、亀井坊可被差出候事

御中間

式拾五人

同年三月十二日御達書佐藤久左衛門より差越、承附返脚

御中間頭
御小人頭江
御駕籠頭

明十三日上野新 御廟所江 右大將様 御参詣被 仰出候

二付、先達而申達候通可心得候事

三月十二日

小出丹宮
永井真之丞

(朱書)
「貳百九拾九」

同年五月

御目付衆

松平伊賀守

右之者先年不屈有之輕追放申付候処、申渡儀有之候間住所相知候ハ、呼寄可申聞、死失・行衛不相知候ハ、親類・身寄之者相糺可申聞旨其筋御申渡有之候様致し度、此段及御掛合候

丑五月

御書面岡田次郎兵衛親類之者相糺候処、行届相知不
申旨申聞候

御賄頭
岩佐郷藏支配
組頭
須藤形兵衛組
新組
佐野藤太夫

右之者岡田次郎兵衛親類之者二御座候

御中間頭
畔柳丈之進
四月廿三日

(朱書)
「三三三」

天保十二丑年五月本多豊後守殿被仰渡候段、一色主水殿立合榊原主計頭殿被申渡御書付返上

御目付江

御中間目付
御小人目付
御中間
御小人
黒楯之者
御掃除之者

右大將様御用向以来兼勤二不及候、右之内先達而增人被 仰付候分者過人ニいたし置、明キ有之候共定人数相成候迄者減切之積可被心得候事

西丸御中間目付 拾八人
同御中間目付見習 八人
同奥表仕切土戸番 六人
同御台所前御門番 六人
同御持鑓之者 拾三人
同大奥裏締戸番 六人
同野方御使之者 九人

右大將様御附可申渡旨豊後守殿被仰渡候間可被申渡候

右四郎殿立合兵庫頭殿被申渡候事

〔三百廿〕
(朱書)

天保十二年六月御部屋仙覺を以鱒附近上

御目付中

遠山左衛門尉

文化十四丑年十月十六日

元御中間

遠島申渡文政元寅年四月十八日

出奔致し候
野口龜之助

右之者親類身寄相糺申聞候様其筋江御申渡有之候様致し度存候

丑六月

御目付中

遠山左衛門尉

文化六巳年十月十一日

大林參右衛門組
元御中間
岡田吉右衛門

一、遠島

右之者親類身寄之者相糺申聞候様其筋江御申渡有之候様致度候

丑六月

下ケ札

畔柳丈之進組

御中間

野口市次郎

右之者野口龜之助親類之者ニ御座候

六月十九日

御中間頭
畔柳丈之進

諏訪部鎌五郎支配
御口之者
神田与作

右之者岡田吉右衛門親類之者ニ御座候

六月十九日

御中間頭
松永半左衛門

〔三百廿〕
(朱書)

同年六月八日本多豊後守殿被仰渡候段、榊原主計頭殿立合佐々木

三藏被申渡鱒附近上

元御中間岡田次郎兵衛養父隠居

外式人御扶助米奉伺候書付

月番
水野采女
榊原主計頭

元御中間次郎兵衛

養父隠居

岡田四郎作

付箋

(朱書)

「此分読合可致事」

同人娘

忝人

右岡田次郎兵衛儀文化七年十二月不屈之儀有之追放被仰

付、此度御免被仰付候処同人儀行衛相知不申、且又右四郎作・

次郎兵衛妻・娘忝人其節夫々親類共江引渡置候ニ付、文化八未

年九月御扶助米奉願候処、同月願之通三人扶持被下置候、然ル

所四郎作儀当月病死仕候旨相届申候、依之妻・娘江被下置候御

扶助米高如何相心得可申哉、此段奉伺候、以上

丑六月

畔柳丈之進

御附札

只今迄之通三人扶持被下候間、得其意
可被申渡候、尤御勘定奉行江可被談候

〔三百廿〕
(朱書)

同年二月十五日

西丸御附御中間・御小人・御駕籠之者姓名書初度 西丸御附被
仰付候節之年号・月日又者 西丸二而増人被 仰付候得共、

其訳相分候様美濃帳相認メ、且亦 西丸向一躰之御定人数并当
時明キ等も有之候ハ、其訳委細相認メ明日中可差出候事

二月十五日

〔朱書〕
〔三百四〕

天保十二年七月十五日日本多豊後守殿被仰渡候段、佐々木三蔵殿
被申渡書面ヒレ付返上

松永半左衛門組

御中間目付

押込無役人

磯部孫八郎

御小人目付

加藤此八

同

神田作之丞

同

山本祝助

平御小人

右之通被仰渡候

右ニ付半左衛門組孫八郎伴磯部武兵衛・丈之進組同人次男稲田

鐘三郎右兩人押込伺差出候処、後刻左之通

武兵衛

御目見遠慮之格可被申渡候

鐘三郎

不及押込

同年九月彈正少弼殿被仰渡候段、内記殿立合庄右衛門殿被申渡書

面ヒレ付返上
御目付江

押込可被差免候

松永半左衛門組

御中間

磯部武兵衛

御目付支配無役

磯部孫八郎

加藤此八

御目見遠慮格可被差免候
右之通被仰渡候事

〔朱書〕
〔三百五〕

同年七月達書当番所生駒藤蔵より差越、五役承附致返脚

黒鉄之者頭

御掃除之者頭

御中間頭 江

御小人頭

御駕籠頭

此度炮術可被遊 上覽御沙汰ニ付 御目見以上并以下共与

力迄抜群炮術ニ達し候者得与吟味いたし可被申聞候事

右之趣堀田撰津守殿被仰渡候間、来ル廿九日迄有無共可申聞候事

七月

池田修理

一色主水

佐々木三蔵

一、此度炮術可被遊 上覽候御沙汰之所、私共之内申上候程之者

無御座候、依之申上候、以上

七月廿九日

右壺通池田為助江差出ス

五役名

(朱書)
「三百八」

同年四月廿四日御当番修理殿江差出ス

覚

畔柳丈之進組

御中間

遠山多助

(朱書)
「三百六 三百九番、三百拾壹番為見合之事」

同年七月廿二日御達書当番所横山為次郎より差越

御中間頭江

此度於吹上御花壇馬場御譜代衆同嫡子・詰衆・御奏者番同嫡子・

菊之間縁頼詰同嫡子・大番頭 御本丸・西丸御持之頭・同御先

手・御使番 御本丸・西丸御徒頭・同小十人頭・寄合、乗馬

上覽ニ付御場所為見分明廿三日四ツ時罷越候ニ付、御供組

頭式人召連候間五ツ時 御城江可差出候事

七月廿二日

佐々木三藏

以上

右者病氣ニ付豆州修善寺江湯治仕度旨相願申候、依之申上候、

丑四月

御中間頭

畔柳丈之進

例書

畔柳丈之進組

御中間

松永清四郎

右清四郎儀文政三辰年二月廿九日信州上之諏訪江湯治仕、同四

月六日歸府仕候

御中間頭

畔柳丈之進

(朱書)
「三百七」

同年七月御達書庄三郎殿被遣候旨大久保熊次郎差越

火事・急事之節

一、御鎗・御長刀持人

三人

右者御供廻り候場所江相廻り候様、且又 出御被遊候節右御

道具奥より出不申候共其場所ニ扣罷在候事

西丸

御小納戸頭取

丑七月

拙者組遠宮多助小者耆人召連豆州修善寺江湯治罷越候ニ付、御

関所無相違御通可被成候、為其如此御座候

御中間頭

畔柳丈之進

天保十二年 月

箱根御関所

御番中

上包美濃紙



(朱書)
「三百拾」

同年八月西丸近藤新十郎相達、三役承附返脚

黒楯之者頭

御中間頭

近々玉川筋江 右大将様 御成之節上目黒村字大橋、右橋向

より御早召之御沙汰ニ候、依之為心得申置候事

八月 林 内蔵頭

右病氣ニ付豆州修善寺江為湯治今朝六ツ時品川宿通出立仕候旨
相届申候、依之申上候、以上
丑四月 御中間頭 畔柳丈之進

(朱書)
「三百九 三百六番、三百拾壹番為見合之事」

同年八月

御中間頭江

一、口附御中間

式百三十拾人

外ニ組頭三人

但乗馬相勤候面々九拾四人有之候間、右替馬攀人有之候ハ、

右人数ニ而相心得可申候

右者明廿三日明ケ七ツ時矢来御門外江相揃候様可申渡候、為差

引組より組頭壹人ツ、差添罷出、諸事掛り御徒目付差凶次第相

勤候様可申渡候

一、乗馬之面々自分馬ニ而相勤候事

但御小人目付差引致し候事

八月

御中間頭江
御小人頭

右大将様玉川筋江 御成之節定例 御成御道具之外御当朝瀬

田村御先ニ相廻り候御道具之分

奥より出候分

一、黒塗御挟箱

一、御茶弁当

一、御召筒 式挺

一、御日傘

一、御雨傘

一、御笠

一、御床机

一、御水箆筒御用

一、御野屏風

一、御草履・御草鞋包

一、糸立包籠

表より出候分御替御道具

一、御鍔鏝

御早召之節表向騎馬御供

一、御目付 壹人

右口附上目黒村 御召出瀬田村 御召留式ヶ所江相廻り候事

右之通可相心得候事

八月

林 内蔵頭

同年九月七日書面承付返脚

一、近々品川筋江 右大将様 御成之節、浜川町外レより御早召

御沙汰ニ候、依之為心得相達候事

九月七日

河野権右衛門

同年九月西丸御使持參承附いたし返却

御中間頭江

御小人頭

右大将様品川筋江 御成之節定例 御成御道具之外御当朝八

幡塚村 御先江相廻り候御道具之分

奥より出候分

一、黒塗御扶箱

一、御茶弁当

一、御召筒 式挺

一、御日傘

一、御雨傘

一、御笠

一、御水篋筒

一、御野屏風

一、糸立包籠

表より出候分御替御道具

一、御鍔鏝

御早召之節表向騎馬御供

一、御目付 壹人

(朱書) 「三百拾壹 三百六番、三百九番為見合之事」

同年九月五日

御中間頭江

別紙撰津守殿御渡、御書付写老通差出候間達向之儀者是迄之通

可被相心得候、以上

九月五日

佐々木三蔵

同年九月六日左之御書付承附返上、天氣能乘馬 上覽相濟申候

明六日乘馬 上覽被 仰出候、大御番頭以下御役当等二而二日目

之節不罷出面々、中奥御小性・寄合等迄不残相触候様可被致候事

九月

(朱書) 「三百拾貳」

右口附浜川町外レより 御召出八幡塚村 御召留 還御之節、新宿村取附三ヶ所相廻り候事
右之通可相心得事

九月 河野権右衛門

(朱書)
「三百拾三」

同月 日当番所并狩紀兵衛達候ニ付承附返却

黒鍬之者頭
御掃除之者頭
御中間頭 江
御小人頭
御駕籠頭

今度御改ニ付其許并組之者役儀ニ附候旨之指物・組合印等寛政
度差出候通可被差出候、彩色分ヶ絵図雛形ニ認メ、厚程村紙
竪曲九寸横式寸六分短冊ニ而壹枚ツ、認メ、都而式通可差出候事

九月 鳥居耀藏

(朱書)
「三百拾四」

同月廿三日

御長屋御門之儀者大切之御締場所ニ付、夜中不寐番も致し嚴重ニ
出入可為改管之処、近年相弛ミ御夜詰引且御締も附候得共、御
徒目付組頭部屋江引候節明ヶ通し、右跡其儘勝手次第出入致し
候様相成候由、且又昼之内御賄所・御台所向より孤包之品茶与唱
無故持出し候ニ付、其者共より聊之品貴請相通候哉之風聞も相聞

如何之次第ニ候、併年来之流弊ニ泥ミ不心得打過候哉ニ付是迄
之儀者不及沙汰候間、以来等閑無之様相心得、別而夜中者嚴重
ニ心を附可相勤事

右之趣御長屋御門番江可被申渡候

十月

右之趣耀藏殿被申渡候間、以来入念右様之儀無之様可被致候

十月廿三日 御中間頭 畔柳丈之進

下ヶ札
被仰渡之趣奉畏候、早速同役共一同
江為申聞候
御長屋御門番
十月廿三日 山本長六

(朱書)
「三百拾五」

同年十月左之御書付御用所田中甚左衛門差越承附致シ、西丸御駕
籠之者頭江相達ス

右大将様 西丸江 御移徙之節御道筋、御駕籠台より御駕籠

被為 召、御玄関前御門・中御門・三ノ御門・内桜田御門・坂
下御門前・西丸大手御門通御玄関江被為 入候

右之通伺相濟候間申達候事

十月

桜井庄兵衛
松平四郎

一、来ル十一日 右大将様 西丸江御移徙之節
御注進

一、御道具出候由

御小人方
西丸江

一、御駕籠被為 召候由

御徒方
同断
右同断

一、内桜田御門

御徒方
右同断

附人

一、西丸下元御厩前江
御先見え候由

御小人方
右同断

一、中仕切御門江
御先見え候由

同断
右同断

一、西丸江被為 入候由

同断
右同断

御徒
一、御道固

忝組

外桜田御門より内桜田御門迄之内

屋敷々々并横小路固大手御門之方出ス

一、御道筋屋敷々々江窓蓋并手桶差出候事

十一月

桜井庄兵衛
松平四郎

同年十一月当番所稲垣藤一郎より差越承附返却

御中間頭
御小人頭
西丸御駕籠之者頭
江

右大将様 西丸江 御移徙之節御供之面々衣服之義、鬘斗目半
袴着用之事

十一月

桜井庄兵衛
松平四郎

右之通伺相濟候、依之申達候事

ここに挿入図あり(巻末参照)

右大将様 西丸江 御移徙之節

御供行列

御徒 忝人

御馬

口附御中間
口附御中間

沓箱 口附組頭

御持筒
御持弓

同心

御徒 忝人

五拾挺 同与力

十人

御持頭

御拋鞆 拾本

御中間

五拾張 同与力

十人

御持頭

御中間組頭 御拋鞆 拾本

御中間

御中間頭

御先番

御徒組 一組

御供番

御徒組 一組

御徒頭

御挟箱 同

御徒組

御供番

御徒組 一組

御徒頭

金藏後御多門江罷越請取候様可被致候、其段御留守居江申達置候事

十一月

桜井庄兵衛
松平四郎

御徒目付組頭江

右大将様 御本丸江被為 成 御移徙被為 在候ハ、 御城内御供之面々当五月西丸 御逼留以前之通 御本丸江相詰泊り致し候、依之御達候事

十一月

桜井庄兵衛
松平四郎

(朱書)
「三百拾六」

一、来ル十九日 右大将様 御移徙以後初而 公方様西丸江被為 成候ニ付、西丸殿中服之儀麻上下着用、御供面々も服儀小袖麻上下着用之事

公方様西丸江 御成御道筋、竹之御廊下通、西之御縁御駕籠台より 御乗輿、蓮池御門通西丸御駕籠台より被為 成、西丸大広間、三之間、大廊下通、御白書院御納戸構より 御座之間江被為 入

一、御供揃四ツ時

一、御本丸殿中平服

一、御本丸・西丸詰合之面々通御之節 御目見罷出

一、還御、西丸御台所口より御裏御門、紅葉山下御門通、西桔橋

右之通ニ候間可得其意候

月

〔中小駕三役江

一、来ル十五日 御移徙相濟惣出仕之節、西丸より 御本丸江被為 成御道筋、西丸御台所口より御同所御裏御門、蓮池御門・下埋御門通り、大広間西御縁より被為 入候、尤 還御之節も右之通ニ候、且 御城内 御成御行列并御供建場・開場之儀、前々之通相心得候様伺相濟申候、依之申達候事

十一月

桜井庄兵衛
松平四郎

(朱書)
「三百拾七」

黒鍬之者頭
御掃除之者頭
御中間頭 江
御小人頭
西丸御駕籠頭

右大将様 御本丸江被為 入候御定日

朔日 廿八日 五日 廿一日

御礼之有無ニ不抱

右之通被 仰出候ニ付、前々之通相心得可申旨越前守殿被仰渡候事

十一月

服部一郎右衛門

(朱書)
「三百拾八」

同年十二月九日御使組頭新太郎・御小人目付世話役清八・西丸御使

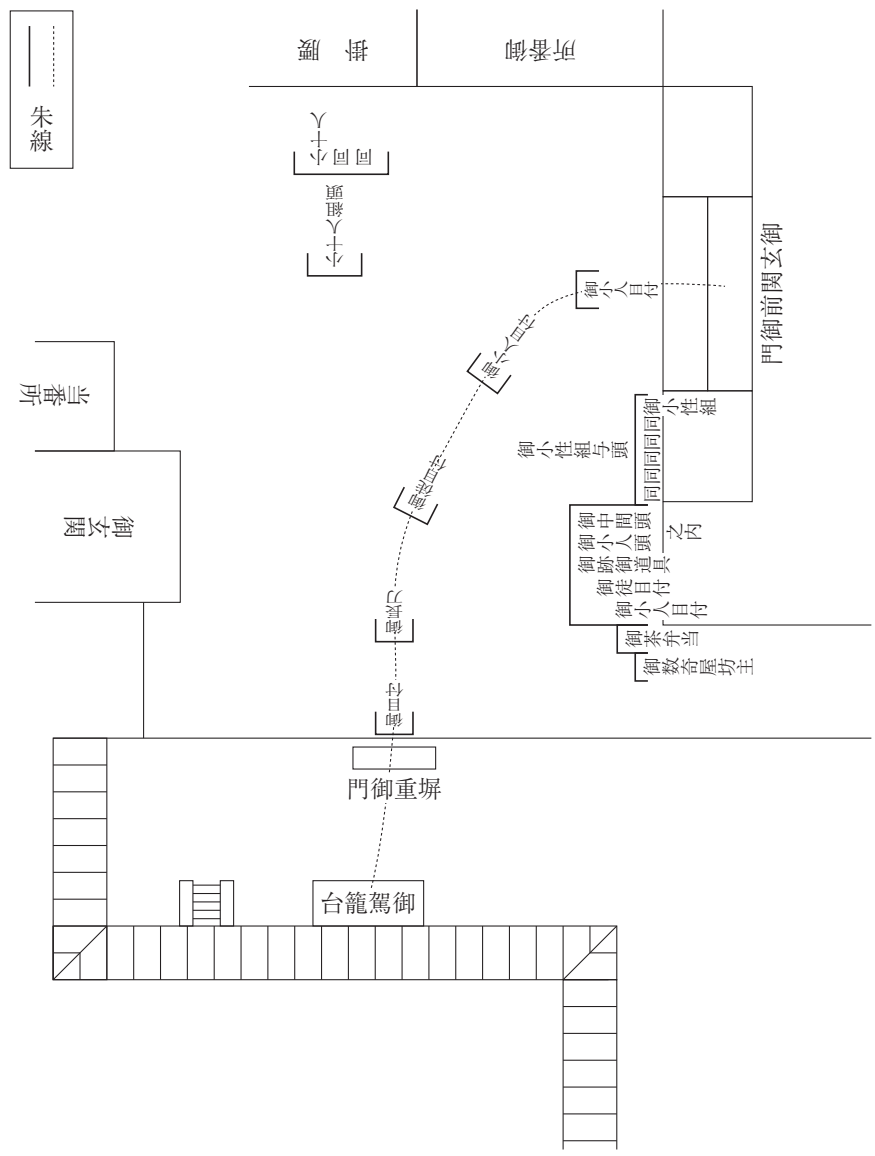
組頭世話役九左衛門江申渡候

一、都而 御成之節奥附御中間目付・御小人目付雨天之節、濡御
手当以来相願申間敷旨鳥居耀藏殿被申渡候事

十二月

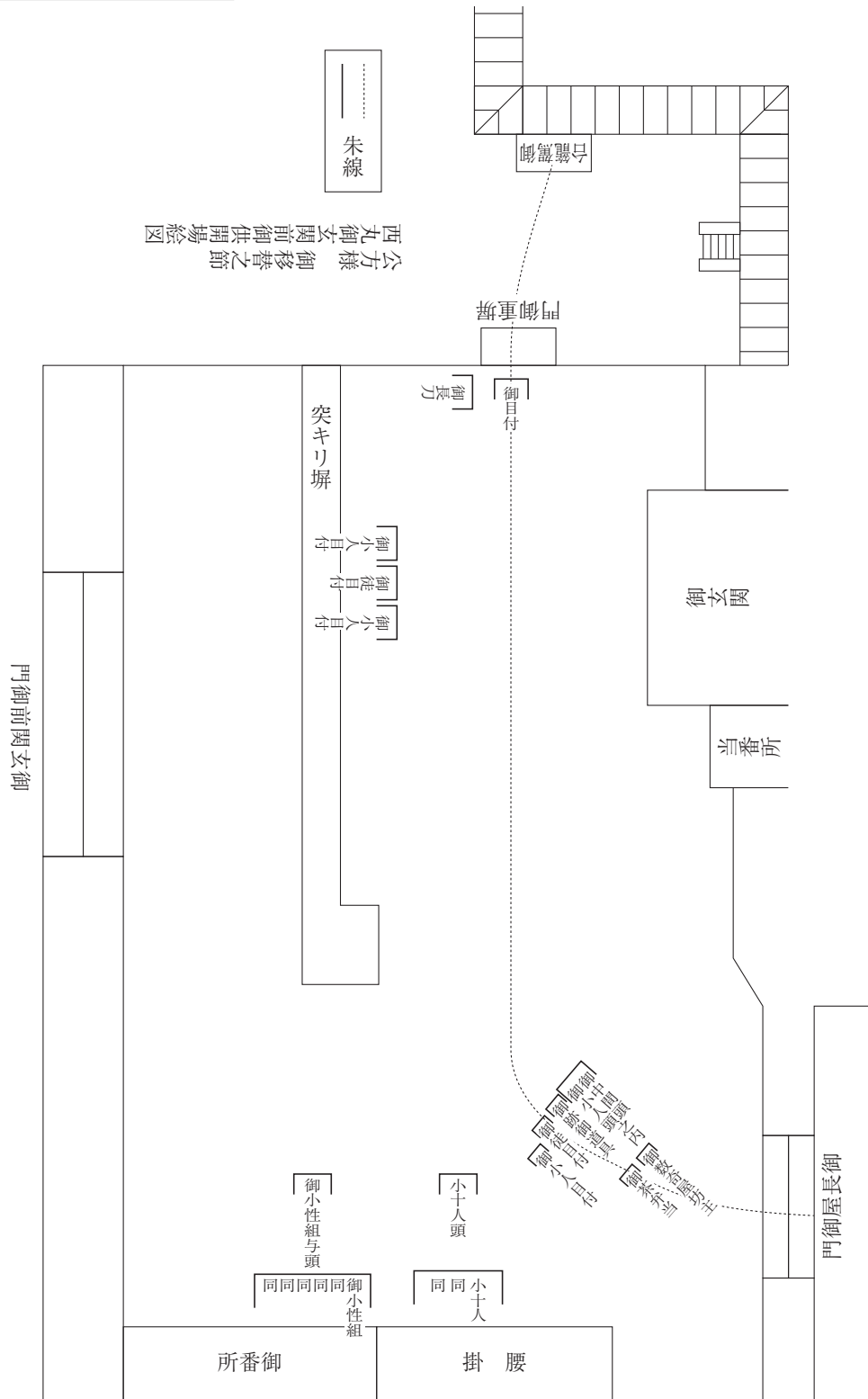
公方様 御移替之節

御本丸御玄関前御供建場絵図



「貳百六拾」挿入図1

「式百六拾」挿入図2



「貳百六拾」挿入図3

